



カレイドスコープ・  
ドラゴン

ふね友み

## 一 虹蛇

急な熱を出すことはよくあった。それでもショーには駆り出されていたので、だから具合が悪くても活動することには慣れている。おまけに、うまくしたもので、演技しているうちに気分がよくなったり、熱で朦朧としている時ほど拍手が大きかったりした。

それで、ママに引き取られてからも、具合が悪くなったら尚更動き回るということをしていたら、怒られてベッドに押し込まれた。それで、熱が出たら休むものなのだと教わった。ママがひどく悲しそうに諭すので、そういうものだと思うことにした。

そういう時――熱を出して寝ている時、ママの皺だらけの手のひらに額に触れてもらうと、すっと熱が抜けていく感じがした。その、一瞬からだが羽根のように軽くなる感じが好きになった。

「隣の州で洪水ですって。ニュースで言っていたわ」

ある時、エンリの額を撫でながら言った。

「おまえは本当に、エネルギーの影響をもろに受けてしまうのだね」

もうママは悲しそうではなくて、むしろしみじみと言った。それでも、少しだけ憂いを含んでいたかもしれない。

エンリには、ママの言った意味はよくわからなかった。ぼんやりと聞いていただけだったが、なぜだか後々まで、この言葉は心に残った。

傍らでは Rond が、暖かな湯気を上げるはちみつレモンを持って覗き込んでいる。

起き上がって飲むと、熱が口の中をわっと襲い、レモンが染みてぶるりとする真ん中を、はちみつの甘さがトロリと喉に溶け込んでいく。

ゆっくりと飲み干してしまうと、また横になる。Rond が不器用に頭をしわくちゃと撫でてくれた。透き通るようなヘーゼル色の瞳が、黒い地肌の中、心配そうに揺れている。Rond ほどきれいな目の色は見たことがない。

ママの所にいる間、エンリは密かに、熱を出すことが嬉しかった。ママには額を撫でてもらえて、はちみつレモンも飲めて、Rond も心配してくれる。

いちばん幸せな時間だったと言っても、とても足りないぐらいだ。

その心地よい <sup>ホーム</sup>家 を出て、はや一年が経った。

エンリは今、バスに揺られて聖地と呼ばれる場所に向かっている。

同乗者は皆ダンサー。今回のイベントのために選ばれ、アイラーツツアの北の州都に集合してバスで会場近くの町に向かう。集合場所までの交通費が出なかったら、エンリはまずこれに応募していなかった。プロのダンサーであるエンリに選り好みは禁物だが、それでも東の州都に住むエンリにとって、北の州都までの交通費はばかにならない。

荒野の向こうでは、暗雲が怪しげなとぐろを巻いている。まだ雨には降られていないが、この分では来るかもしれない。雷の唸りが聞こえてくるような、鉛色の奇妙に明るい空色だ。それでも実際に雨が降ることは滅多に少ないのが、ここ数年の空模様だった。

窓の外を眺めながら、エンリは嫌な予感を得ていた。先ほどから妙に身体がだるく、頭の奥がチリチリとしている。この分ではしばらくすると寒気に襲われそうだった。たぶんそうなるだろう。

隣に座るのは背のおうしょく高い黄色系の男で、二十代の後半のようにエンリには見えたが、年齢を当てるのは苦手なのでよくわからない。発車して早々に眠りこけてくれたのはありがたかった。無駄な気を遣わずに済む。

地図を見ずとも、聖地と呼ばれる会場が何処だか、エンリには分かる気がした。選り好みは禁物だし、実際このところ大した仕事は無かったからありがたいのだが、しかしこの仕事を得たと知った時、実は少しげんなりした。

ママの言った意味が、今のエンリには、以前よりも実感としてわかるようになっている。ようは、いわくつきの場所は、基本的にエンリの鬼門なのだ。聖地なんて、その最たるものと言ってよかった。

早く終わるといい、と、エンリは仕事が始まりもしない内から既に考えている。

降りたのは、埃っぽい田舎町だ。乾燥している土地柄、色合いが砂っぽく、風の色もどこか茶色い。バスから宿屋や土産物屋がいくつも見えたので、観光で生計を立てている町なのだろう。エンリも、観光地として聖地の名を聞いたことはあった。

宿に荷物を置くと、休憩もそこそこにスタジオに向かわされた。スタジオと言っても、町の公民館の小さなホールだ。練習場所としては狭いとしか言いようがないが、それでもあるだけマシン、なのだろう。正直なところ、州都で練習してから来ればよかったのに……と、思わないでもない。実際、会場に入った途端に不満の声が漏れるのが聞こえた。しかしエンリはプロのダンサーなので、ささいなことで文句はつけない。プロとはつまり、あくまで生計の手段としてダンサーをしているということなので、アーティスト気取りで口やかましく言ったりはしないのだ。第一、エンリの若さでそんなことをしたら仕事を干されてしまう。

「ハイハイ、じゃ、ちょっとこっち集まってー」

手を叩いて言ったのは、今回のリーダーだ。精悍な身体つきをしているが、派手な色合いの服――鮮やかな虹色のスカーフは一際目を引く――に、くっきりと引かれたアイラインがはっきりと女性的な印象を与える。レスリーという彼は、何年か前に有名なアイドル歌手のミュージックビデオの振り付けを担当して評価され、アイラーツツアのダンサーの間では今一番のカリスマと言っているだろう。テレビで見た印象通り、エキセントリックかつスピリチュアルなゲイという感じだ。本物を初めて目にした時は、さすがのエンリもちょっと感動した。何代か前に茶の先住民の血が入っていることもあって、今回のイベントを任せられたらしいが、見た目にはただのはくしょく白色だ。

不満を口にしていたダンサーたちも、レスリーの声にはいくらか緊張して耳を傾ける。

「えーっと、改めて自己紹介をしていこうと思います。ボクはご存知の通りレスリー。オーデ

ィションでも会ったよね、今回のダンスの責任者です。まあ、ボクのは最後にしようと思うので、……えーと、そうだな、輪になってもらおうかな」

ダンサーと言っても、誰もが普段からキビキビ動く訳ではない。戸惑いながら、そしていくらかの興奮を隠すように、のろのろと輪が形成される。

「そうそう、こんな感じに。じゃ、点呼も兼ねていきたいので、ボクが名前を呼んだら、返事をして自己紹介してください。人数が、えーと、二十人。そう、二十人いるので、あんまり長くても困っちゃうんだけど、今の気持ちとか、最低でも今までのダンス暦ぐらいは言ってほしいよね。じゃ、まずは、ユーリー・アルダ」

エンリは内心うんざりした。喋ることは苦手だし、人の話を聞くのもちっとも面白いとは思えない。ロンドやマーマならこういう機会も楽しんで、ついでに一分もあれば全員と友達になれるのだろうが、エンリには無理だし、大して興味も持てない。大体、ダンサーなのだからダンスさえできれば充分だと思うのに。

大して気を払わずに輪の中に立っていたエンリだが、

「スノーホワイト」

というレスリーの声を耳にした時は少しばかり心を動かした。

スノーホワイト  
—— 白雪姫 ？

「はい」

はきはきと答えたのは、すらりと背の高い女性だった。雪のような肌（と言っても、実際に雪ブロンドを見たことはないから、想像だ）を太陽のキスに赤くして、透けるような金髪を一つ結びに揺らしていた。細く長い、しなやかな手足はダンサーになるために生まれてきたと主張しているようで、ちびで華奢なエンリとは大違いだ。

しかし注意を払ったのはそこだけで、あとは大して聞かなかった。

「エンリ・トマソン」

ついに自分の番が来てしまって、エンリは心中げんがりしながら、ぼそぼそとこれだけ言った。

「はい、エンリです。小さい時はずっとサーカスで曲芸やダンスショーをしていました。ダンサーになってからは一年ぐらいです。よろしくお願いします。以上です」

自分を見る、わざとらしく驚いた表情や張り付いた微笑みにはいらっとした。それでも、特に質問もされなかったし、声を大きく、などとも言われなかったので、ほっとした。

自分の番が来たのは嫌だったが、実のところ、フルネーム 氏名 を呼ばれること自体は悪い気はしないのだった。トマソンの苗字には、マーマの暖かいホームを思い出すからだ。

エンリの後にもう二人呼ばれて、それで全員らしかった。

「はい。それじゃあ、これから一週間、短い間だけど、この二十人でやっていきます。ボクはけっこうスパルタだと思うし、日数も少ないからね、面接でも言ったけど、覚悟はしてください。だけど、あなたたちは三百人以上の応募者の中から選ばれたのだから、どんな時でもそのことに誇りと自信は持つこと。これは忘れないでね」

皆神妙に聞いている。大きく頷いている人もいる。

「あとね。これから少し、このイベントについてお話をします。もしあなたが、ダンサーはダンスだけ踊っていればよいと思っているなら、関係ないと思うかもしれないような話です。けれど

ボクは大事なことだと思うし、今回のダンスの成功に欠かせないと思っているので、これは義務としてしっかり聞いてください」

またもやげんなりするエンリ。なんとなく、レスリーはこういうタイプの人間——言葉を必要以上に重視するような——ではないと思っていたのだが、勘違いだったようだ。そもそも、こういうことなら、何故エンリを選んだのだろうか。オーディションの時だって、演技の間ならともかく、話している時はいつも通りの仏頂面だったはずだ。やる気に満ち溢れた明るく前向きな人間ではないことぐらい、明らかだったはずなのに。

だが、義務と言われてしまうと聞かないわけにもいかない。

「まず、このイベントは、舞台となる聖地がアイラーツアの保護区に指定されて半世紀経ったことを記念するものです。元は先住民の聖地だったことは知ってるよね？ 先住民がこの時期に行うイベントと言えは雨乞いです。ですからボクたちの踊りも、必然的に雨乞いの踊りとなる——ボクは、そしてもう一組のダンサーたちである先住民の直接の末裔の方々もだけどね、今回のイベントは、州政府主催のお祭りの形を取っているけれども、古代の雨乞いの儀式の、核のところの再現であるべきだと思っている」

レスリーの語りは一段と熱を帯びた。

「聖地と呼ばれる場所に立つことの意味を、あなたたちにはよく考えてほしい。ボクたちは、ただのお祭り騒ぎのために、あるいは単なる顕示欲というエゴのために踊るのではない。もっと大きなものの一部になるのです。そうでなければ、聖地に上がってその土を踏む資格は無いんだ。それほど、聖地というものが、役人たちが考える以上に特別な場所なのだということを、あなたたちにはよく知っておいてほしい」

一気に喋って、レスリーは少し声の調子を落として笑った。

「今の時点では、ボクが何かキチガイじみたことを言っているように思う人もいるだろうね。だけどボクがそういう気概でこれに臨むんだってことは分かっている。それから、保証するけど、一週間後には、あなたたち皆が、この精神と世界のうねりの、一部になっているはずだよ」

スタジオに着いたのがもう午後だったから、初日は半日の稽古で済んだ。自分で言った通り、レスリーは中々スパルタだった。長旅の後だし、まだ勝手が掴めていないということもあって、皆時を追うごとにへとへとになっていった。

もっとも、エンリはといえば、割とけろりとしている。レスリーは、ダンサーとしては鬼のように厳しいのかもしれないが、エンリの子ども時代を支配したサーカスの座長に比べれば天使のようなものだ。

実のところ、町に着いた時には既に寒気やだるさを感じていたエンリは、今も身体が半分浮いているような熱っぽさに襲われていて、健康体のくせにへたっている年上のダンサーたちを軽蔑せずにはいられない。しかしプロであるエンリはもちろん、そんな気持ちはおくびにも出さない。

とは言え、のろのろとまるで疲れを見せ付けるように動く大人たちに付き合う義理も無いので、さっさと宿に帰ろうと身支度をする。していると、声をかけられた。

「ねえ。あなた。えーと、エンリ、よね」

——白雪姫。

唯一名前を覚えている相手が、半ば身体を地面に預けたままで、未だ引かぬ汗に紅潮した肌を光らせて、写真でしか見たことがない湖のような瞳を輝かせていた。

「あたしはウィッティ」

にっこりと、ウィッティ——愛称だろう——は笑って手を差し出した。

エンリはその手を握り返す。多少熱くても、激しい運動の後であるからわからないだろう。笑みは返さなかった。あまり話したくなかった。

「あなた、すごいよね。こんなに小さいのに、あんなに動けるなんて。あたし、時々見とれて自分のことが疎かになっちゃった」

鈴の弾むように語りかけられ、エンリは肩を竦める。曖昧な笑みぐらいは返した、かもしれないが、いいかげんに朦朧としてきたし、よくわからない。ウィッティの高い声も、あからさまな賛辞も、元々そういったものが苦手な性質であるのに、熱のせいでより一層、忌々しい。

「ね、それにしても、意外と大人ばかりなのね。びっくりしちゃう、十代はあたしたちぐらいみたいよ」

そうか、話し相手が欲しいのか……と考える。残念ながら、声をかける相手としてエンリは、全く適切な選択ではない。

「エンリは今、いくつ？ あたしは十九で、もうすぐ二十になるんだけど」

どうでもいい。思いつつ、ぶっきらぼうに答える。

「十六」

「あら、そんなもの？ もっと若いかもと思った」

早くどこかに行ってほしい。

「でもそうか、十六かあ。あたしのね、大学のクラスにも一人いたわよ、十六歳。二年飛び級し

てきた奴。エンリは、これから十七？ それとも十六になったばかり？」

「これから十七」

「そっか、じゃあやっぱり一緒だわ、あいつと」

この会話には、内心反応したエンリだったが、表立っては動じなかった。

とにかくこの場では、この女——ウィッティ——の話を長引かせる、どんなネタも提供したくなかった。

この後もしばらく何やら話しかけてきたウィッティだったが、にこりともせぬエンリにさすがに白けたらしく、やがて戸惑ったようにこやかさで

「じゃ、また後でね」

と立ち上がった。開放されるということだ。ありがたかった。

エンリが身支度を終えて去る時、ちらりと見ると既に他のダンサーと楽しそうに話していた。ロンドと同じ人種なのだろう。

あの気安さそのままに、ウィッティはひょっとしたらロンドとも会話したことがあるかもしれない。二年の飛び級をする人なんて、少ないとしてもいくらでもいるに違いなかったが、そんな詮無き想像をした。

ママに連れて来られたばかりの頃、もう三年前になるが、エンリはまるで人との付き合いというものを分かっていなかった——今だって、大して分かっていないが、比ではなかったのだ。ロンドは面倒見がよく、辛抱強く話しかけたり、声をかけたり、外に連れ出してみたり……一緒に住んでいるのだから当たり前だったのかもしれないが、思春期の男の子とは思えない（今にして思えば、だが）マメさと懐の広さを持っていた。エンリにとっては新鮮だったが、初めは目をぱちぱちとしながらまごつくばかりだった。エンリの知っている男の子といえばサーカスの兄たちで、彼らは優しくなくはなかったものの、もっと乱暴で、ぶっきらぼうで、優しくするにしても不器用だった。

ママの グリーンハウス 温室 は、一応、塾、ということになっていたが、主婦や学生や、もっと小さい子どもたちまでが入り乱れる、ある種の社交場だった。それでも「塾」の役割も果たされてはいて、アルバイトやボランティアで子どもたちを教える若者もかなり来ていた。塾の卒業生も多い。

ママの家の子どもは、その時はもうロンドとエンリだけだったが、当たり前のようにここで勉強することになっていた。

よく分からないままに、初めて賑やかに人の集まった温室に連れ出されたエンリは、隅でぽつんと座りながら、眩しい喧騒を観察した。

若者たちは、それぞれに割り振られた生徒がいるようで、色々な会話が入り乱れて聞こえてきた。

「はい、ちゃんと宿題やってきたー？」

「え、今日学校の先生休みだったの？ なんで？」

「なんかねーえ」

「ちょっとそこ、おい、こら、座れ、勉強の時間だ！」

ぎゃはははは、と甲高い笑い声が上がる。

その賑やかな様相を、少し外れたところのテーブルで、母親たちが楽しそうに見ている。ママや、他のばあさまやばあさまたちもここでお茶をしている。

そのテーブルから赤ん坊の泣き声が上がると、これ幸いとばかりに子どもたちが殺到した。先生役の若者でも、一緒になって野次馬している人もいた。

上を見上げると、太陽の光が燦々と、しかしふしぎなぼやけ具合で差し込んで、細いながら高々と伸びた木々や、それに乗じて登る蔓の葉を、独特の白さで包んでいた。

つんざくように、赤ん坊の泣き声が響く。

前日にもここには連れて来られたはずだったが、印象が全く違って、昨日はもっと暗くて、ただ、ふうん、ぐらいにしか思わなかった——そうだ、確か曇りで、だいぶ日も翳っていたのだ。それに、その時は誰もいなかった。

「エンリ」

ロンドが声をかけてきた時、実はロンドがこちらに歩いて来ていることにはずっと気づいていた。だけどエンリはまだ、この気安さに戸惑っていて、気づかない振りしかできなかったのだ。

ロンドの声に、子どもたちの神経が——たぶん子どもたちだけでなく、その場の大量の人間の——急に、こちらに集中したのがわかった。先ほどから、ちらちらと視線を向けられてはいたが、特に紹介された訳でもなかったし、またガリガリの痩せぎすで、異様な雰囲気纏う子どもに気後れしたようで、もじもじと気にするばかり、話しかけてくる者は無かった。そういう態度に慣れていたエンリはむしろほっとしたぐらいだった。サーカスの子どもはそんなふうには他と一線を画していて、ロンドのように無邪気げに話しかけてくる者なんていなかったのだ。ママも、そういうエンリを分かっている、あえて大仰な紹介をしなかったのかもしれない——これも、後になって思ったことだが。

ロンドの手には本の束が抱えられていて、それをどんとテーブルに下ろすと訊いた。

「エンリは何を勉強したい？」

朗らかなロンドの顔を、エンリは見上げた。

「勉強？」

「うん、勉強。エンリはサーカスにいたから、あんまりして来なかったかもしれないけど……せっかくだから、やった方がいいと思うんだよね。って、ママが言ってただけ。こっちの学校に編入するにしても、一応試験があるし。おれ、教えるの得意だしさ。数学なんか、結構やってた？」

「……」

黙りこくってしまったエンリに、ロンドの戸惑いが伝わる。

「えーと、数学は嫌い？　じゃ、歴史とかにする？　初日だし、何から始めてもいいと思うよ。教科書は一通りあるし。理科とかも、けっこう面白いと思うんだけど……もし、今まであんまり勉強してこなかったんなら、初めは歴史とかの方が楽しいかなあ」

エンリはまだ喋らない。

「あ、ひょっとして、同い年のおれに教わるのは嫌？　もしそうなら、誰か先生を呼んでくる

けど……」

エンリは立ち上がった。

唐突な行動に Rond が目を丸くしている間に、さっと踵を返して家へ向かった。

「え。エンリ？ おーい。ちょっと、どうしたの」

追いかけてくる Rond を拒むように、ボタン、扉を閉じた。

エンリが、文字が読めないということが発覚したのはその、三日後だっただろうか。

基本の文字は一応知っていたが、綴りを学んだことはなかった。ごくごく簡単な、たとえば看板の文字などは読めることがあっても、文字の組み合わせによっては読めも書けもしないものが多々あった。

勉強をしないどころか、学校に行ったこともなければ、本を読んだことすらなかった。そのことに負い目を感じたことはなかったはずだが、ここではあまりに皆が皆、文字を知り、学校に行き勉強しているということを当たり前に行っているものだから、急に海に放り込まれた川魚のように、言うなればパニックに陥ってしまったのだった。

「ごめんなさいね、わたしとしたことが」

ママの、困りきったような、ちょっと珍しい、情けない顔。

「ごめんね」

Rond の、エンリが逆に驚いておろおろしてしまったほどの深刻な謝罪の顔は、ちょっと忘れられない。

もっとも、ふつうの海の生き物に、川魚の泳ぎ方などわからなくて当たり前なのだった。それなのにこうも強かった二人の反応は、逆にエンリに、文字が読めないことの悲劇を強烈に印象づけた。

その時、初めて――たぶん、初めて、エンリは自分の育ちと無知とを恥じた。

それからは、それこそ川をも呑み込む勢いで、知識を吸収した。

温室の片隅で、Rond がエンリに教えていると、誰が初めだったか、他の子どもたちも合間にやってきては口を出すようになってきた。レアラにマリー、ダントンにミック。お節介な友人が何人もできた。Rond は、未だにエンリには仕組みがよく分かっていないのだが、飛び級とやらを二年分もするほどの秀才で、だけどその分自分の勉強も大変だっただろうに、熱心に、つぶさに、エンリに教えてくれた。

半年もすると、当初の鬼気迫る勢いはさすがに、すっかり抜け落ちてしまった。それでも一度として集中力を落とすことなく取り組み続けたのは、今まで知識を学んだことのなかったエンリが、ある種の娯楽として勉強を楽しんでいたからには違いない。

しかしそれ以上の大きな理由は、Rond があまりにも当然という顔をして、思い返せば笑ってしまうような情熱で、エンリの学びを計画し、実践し続けてくれたからだった。二人の授業とエンリの自習は、たとえば朝起きて顔を洗って歯磨きをして……というのと同じレベルで、すっかり習慣として定着していた。だいたい、サーカスを出てしまえば、エンリには他にやることなど

大して無いのだった。

そんな二人の関係を、ママは愉快げに見守った。

「エンリは、ドラゴンで……」

ママは時折、思い出したように口にした。エンリは <sup>ドラゴン</sup> 龍 なのだと、これはエンリをサーカスの舞台裏に初めて尋ねてきた時から言っていたことだ。

「ロンドは、獣使いの血を引いているわね。ぴったりの組み合わせと、言えなくもないのかも」

こういうことを言う時のママには、ロンドは肩を竦めるばかりだったから、そこはエンリも倣うことにした。けれどもエンリは、よく分からないながらも、密かにこの言葉には納得していた。

結局エンリは学校に行かなかったが、ロンドいわく、そのまま高校に編入して順調に勉強すれば、中流大にはまず確実に行ける程度の実力が付いたらしい。大学と言えば、エンリはとにかく秀才のための高級な所だと思っていたのだが、たった二年の勉強で入れるようになる程度のものなのだろうか。それでも、普通の子どもというのはあまり勉強をしないようだから——これは、だいぶ余裕を持てるようになってから気づいたことだったが——そういうこともあるのかもしれない。

だが、エンリはその道は選択しなかった。

十五になると、ママの家の子どもたちは家を出なければいけない。ママは、ロンドとエンリは最後の子どもだし、エンリは来たのも遅いから、高校に行きたければ少なくとも卒業まではここにいてもいいと言った。そうでなくて、働くことにするなら、初めの資金は出してあげるし、仕事の世話もしよう、とも。

ロンドは、その頭脳で奨学金を得て名門大学への入学、それから入寮も決まっていた。

なぜと言われても、困ってしまうのだが、エンリはロンドが家を出てからも勉強を続ける気には、どういうわけかなれなかった。ロンドが行ってしまうなら、エンリも勉強から卒業するのだという感覚があって、その気持ちに従った。

サーカスにいた時みたいに、だけどサーカスには戻らずに、またダンスやショーをして生活することはできるか、と訊いた時、ママはなぜか少し複雑そうな顔になって、エンリの跳ねがちな灰色の髪を撫でてくれた。いくつか挙げられた可能性の中で、派遣会社と契約をして、ダンサーとしてあちこちのショーに出張するという選択をした。ママの知り合いの知り合いの紹介で、ダンスの審査はあったものの、契約はあっさり済んだ。

ロンドが家を出る時、エンリの新しい家は決まっていなかったから、ロンドは自分の新しい連絡先を書いた紙をエンリに渡した。

「元気でね。家が決まったら、ちゃんと連絡しろよ」

エンリは頷いた。

聖地の町でのレッスン、二日目が終わると、レスリーに呼び出された。

特にまずいことをやった自覚は無かったが、ひやひやした。無愛想な態度を注意されるのだろうか。しかし真面目に取り組んでいるし、レッスン中の表情なんて人それぞれだ。演技中であれば、エンリだってプロだから、レッスンの中であっても満開の笑顔を振りまいているはずだ。それとも、まさか熱が出ているのがばれたのか。でもエンリは今のところ他の誰よりもよい動きをしているはずで、それに文句をつけられる謂れなど無い。

他に人のいなくなったスタジオで、乾きかけた汗にタオルをあてながら、レスリーは颯爽と立ってエンリと向き合った。

「疲れてるのにごめんね。……それとも、あなたはそんなに疲れていないのかな？」

エンリは曖昧に首を傾げた。こういう質問は苦手だ。疲れていないわけではないけど、殊更に声を上げるほど疲れているわけでもない。熱でしんどいのはあるが、それは疲れているのとはまた違う気がする。

「今日あなたを呼んだのはね、」

レスリーは何か気づいたように言葉を切ると、母性的な微笑みを浮かべた。

「緊張してるのかな？ 別に叱るわけではないから、安心していいよ。でも、じゃあなんで、ボクはあなたにこうして残ってもらったのだと思う？」

エンリは途方に暮れて佇んだ。

叱られるのでもない。褒められるようでもなさそうだ。何か特別な役割をくれるとか？ でもだとしたら、なぜこんな紛らわしい質問をするのか、わからない。

「エンリ、あなたは踊る時、何を考えてる？」

エンリは困惑してレスリーを見返す。

何を？ 何故？

「……何も」

「うん。じゃあ、たとえば、難しい振り付けもたまにはあるでしょう？ 会得するために、どんなことを考える？」

ますます困惑する。

「……何も、考えません。見て、真似るだけ」

踊ることの一体どこに、考えの入る余地があると言うのだろう。

「うん、そうか。じゃあ、どんなところを見るの？」

「……動きを」

レスリーはしばし考えるように宙を見つめた後、深い溜め息を吐き、エンリは身構えた。

「どんな踊りでも難なくこなせることが、逆にあなたの枷なのだろうね。このうえなく自由でありそうで、実際、信じられないほど自由に手足を操ることができるのに、あなたはちっとも自由でないんだね」

これには眉をひそめたエンリだった。

何を以ってそんなことを言うのだろう。考えて動くことのどこが自由だと言うのか。言葉に縛られて踊ることの、どこに自由があると言うのだろう。

猫ならば全身の毛を逆立てていただろう、そういう反発が溢れてきた。しかしエンリはプロであるから、やはり顔には出さなかった。

ただ、解せないと言いたげにレスリーのきらきらしい顔を見上げた。

「ボクが今日、レッスンの間に何を言っていたか覚えている？」

エンリは答えない。大して聞いていなかった上に、一日中レッスンで喋っていたのだから、どの言葉について聞いているものやら見当もつかない。

レスリーの静かな呼吸が聞こえる。

「エンリ、あなたにとって、踊りとは何？ 単なる生活の手段？」

エンリはただ見返す。

「あなたの踊りは、それは確かに、群を抜いている。安い観衆ならイチコロだ。玄人でも、本物を求めない人は……いや、そうでなくても、誰だって絶賛するだろうね。その実力は今日でよく分かったよ。だけど、今のあなたは、そうであっても、偽者だ」

さすがに、眉を寄せた。

「ボクが求めているのはね、エンリ。本物なんだよ」

一方、レスリーの瞳は情熱を隠し切れず、たぎるように輝きを増している。

「このままでは、あなたは精巧な踊るアンドロイドだよ。だけどあなたは本物になれる。ボクには分かる。見えるんだよ。歯痒くて仕方がない。あなたなら、絶対に、世界と人との架け橋になれるのに」

けなされているのか褒められているのか分からないが、熱っぽく語るレスリーは、正直気味が悪いと思った。

しかし、

「ボクには、あなたの中に、開放されたがっている何かがあるのが見えるよ。どれほど踊っても、このままではいつまでも、それはあなたの中で鬱屈して渦巻いているんだ」

——エンリ、あなたはドラゴン。

ふいに、抑えた興奮と共に語るレスリーに、なぜか初めて会った時の、この世ならぬほど穏やかに思えたマーマが重なった。

一本道だった時間の流れに、急に過去からのびっくり水が注ぎ込まれたようだった。

「ボクが今日、繰り返し言ったのはね、この世界との繋がりを想えてことだよ」

そういえば、聞いたような気がしなくもない。

「ひとりよがり自分の身体だけに気持ちがいってしまうようでは、それは本当のダンスだとは言えない。踊りを通じて世界と一体になったところに、本物が生じるのさ」

ひどく宗教じみているうえにやたら断定的な言い方だと、エンリは思った。だから聞き流していたのだろう。

「エンリ。考えてみて。ダンサーなら誰もが欲しいと願う理想的な身体をあなたは持っているよ。なのに持て余している。このうえなく、勿体無いことだよ。よく考えてみて。ボクはあなたに

、本物になってほしいし、絶対になるべきだと思う」

エンリは曖昧に頷いた。

宿の部屋に戻ってから食堂に行くと、既に皆食べ始めていて、たまたま目が合ったダンサーからの誘いに気は進まないながら応じた。バイキング形式に並べられた皿から、メインのパスタとサラダだけを取って赴く。

たぶん今回最年長の、白色で刈り上げた赤毛の女性は、六、七人とテーブルを囲んでいたところ、入ってきたエンリに気づいて手を掲げて呼び寄せたのだった。テーブルには例の白雪姫もいて、開けられた席はちょうどその隣だった。

「話題の天才少女が来たね！ レスリーの話って何だったの？ あ、ちなみにあたしはミアよ、知らなかったなら言うけど。あんたはエンリよね、もうみんな知ってるわ！ さっきも話してたのよ、何あの妖精みたいな女の子は、って」

豪快な口調の割には落ち着いた声だったので、エンリは必要以上におっくうがらずに済んだ。

エンリが首を傾げつつ言葉を探していると、

「おいおい、そんなに言いにくいってことは、まさか口説かれたとか？」

バスで隣合った黄色系の男が言い、周りも同調してどっと笑う。バスで静かだったのは、あくまで寝ていたからだけだったらしい。

「いや。……何か、叱られた、みたいな」

「えええー？」

誰かが声を上げると、

「まさか！ なんでさ」

「ありえないでしょ、あんな飛び抜けた動きしてたのに」

「どう考えたって一番動けてたよね」

「え、嫉妬とか？ いじめってやつ？」

「あっはっは、レスリーはそんなタイプじゃないでしょー」

一気に飛び交う会話に、少し頭痛を覚えるエンリ。踊っている間はまだよいが、普通に生活していると熱はより存在を主張してきて、大きな物音などはいささか辛い。

しかし、それなりにダンサーたちがエンリを受け入れてくれているようなので、そこまで嫌な気分のするものでもなかった。ダンサーは優れたダンサーを尊敬する。業界に入るまでは考えもしなかったことだが、そういう意味でも、エンリの選択は正解だった。

同時に、不思議でもあった。まだ二日目だというのに、彼らはいつのまにこれほど打ち解けたのだろうか。合宿での仕事というのは初めてだが、昨夜エンリが食事もとらずに寝ているうちに親睦を深めたのかもしれない。それにしたって不思議だ。

「具体的にはなんて言われたの？」

となりの白雪姫が訊くので、どう言えばよいものかまた考えていると、ミアが

「ま、特別な宿題をもらったってことでしょ、きっと。あたしたちとはレベルが違うからね、宿題も難しくなってくるんだろうね」

エンリは首を傾げつつ曖昧に頷く。

それから、なんとなく話題は流れていった。

部屋を暗くして寝る体勢に入っていると、ドアのきしみと共に外のはちみつ色の明かりが鋭く伸びてきた。それが人影に切り取られて、ドアの閉まる音でまた暗闇に戻る。

入ってきたのは、影から言って、白雪姫だろう——昨日は先に寝てしまったし、忘れていたが、ルームメイトなのである。

近づいてくるのが分かると、エンリは瞼を閉じて寝たふりをした。

「エンリ？」

枕元からの囁き声にも、知らん振りを通す。

そうしたら額に手をかざされた。一瞬で、熱が白雪姫のひんやりした手にとられていった。溜め息を吐かれる。

ああ、やっぱりばれてたか。先ほど、席を立つ時にうっかり立ちくらんでしまい、その時支えてくれた彼女は、

「ちょっと、あんた、あつ……え、具合悪いの？」

と、戸惑った調子で口にしたのだった。

「いや、ちょっと疲れただけ。早めに寝るよ」

と返したが、やはり疑惑は持たれてしまったようだ。

エンリはパチリと目を開けて、すばやく言った。

「大丈夫だよ。いつものことだから、他の人には黙ってて」

白雪姫が、びくりと肩を震わしたのがおかしかった。

「お、驚いた、起きてたの？　　というか、大丈夫、じゃないでしょ」

「大丈夫。いつものことなんだ。別に具合が悪いわけじゃなくて、熱があるだけ。昔からよくあることだから」

「熱があるなんて、具合が悪い以外の何物でもないでしょ」

まあ、そうかもしれない。

「これであんなに動いてたなんて、信じられない。ひょっとして、昨日から？」

今度はエンリの方が溜め息を吐いた。

「うん……バスで、ここに近づいてた段階で。それまではピンピンしてたんだけど、聖地って呼ばれてるぐらいだし。しょうがない」

白雪姫が、まじまじとこちらを見たようだった。

「あなたって意外とスピリチュアルなの？」

「全然。だからレスリーにも呼ばれて……ああ、とにかく。頼むよ、白雪姫。黙ってて。今までも、これで普通に仕事してきたんだ」

白雪姫はじっとエンリを見つめた。

「……白雪姫じゃなくて、ウィッティでいいわ。キスを待ってるお姫様なんて、柄じゃないの」

「ウィッティ。頼むよ」

ウィッティは観念してくれた。

「わかった。ただし、無理は禁物だからね。他の人には言わないから、大変な時にはあたしを頼って。これは絶対条件よ」

「うん。ありがとう」

素直にお礼を言う。

すると、ウィッティはもう一度額に手をあてて――まるで、それがエンリを救うものだと分かっているかのように――その上から軽くキスをした。

「起こして悪かったわ。ゆっくりおやすみなさい、<sup>ベイビー・ガール</sup>かわいい子。また明日ね」

エンリは頷きつつ目を閉じる。

やっぱり、ウィッティはママやロンドと同じ人種だ……。

上達していくダンサーたちを見るのはいつも、苛立ちとないまぜではあるが、興味深い。上達はいつも、徐々にではなく、飛翔の瞬間を以って訪れる。急に一つ上のステージに持ち上げられた、そういう驚きと喜びは周囲にも発展の連鎖をもたらすのだった。

今回の合宿でも例外ではない。四日目にもなると、かなり形になってきた。

普段なら、やっとここまで追いついてきたか……と感慨もなく、しかし多少の安堵とともに見るのみだが、今回はレスリーの言葉が引っかかかっていて、複雑な気分の上昇気流に乗るダンサーたちを見つめている。

レスリーが作り上げているものと、今まで見てきたダンスの違いは、なんとなく分かる――たぶん、レスリーが作り出そうとしているのは、動きというより、空気だ。エンリは動きに苦労しない分、一歩引いて全体を見られる。それで感じるのは、レスリーがこだわっているのは、個々の動き以上に、流れである。優れた振付師であれば当然のことかもしれないが、それにしても独特な思い入れを感じる指導で――レスリーが満足げに、

「そう、今の！ 今のだ、今のだよ！」

と皆を褒め称えるのは、奇妙に空気の匂いが変わった時なのだった。

匂い、と言ってよいものかわからないが、ダンサーたちが我を失ったような高揚感で思考を置き去って踊っている時――そうだと分かる時――何か、醸し出される匂いがあるのだった。サーカスでは経験したことのない感覚である。エンリのいたサーカスでは次から次へと演目が変わったし、常に座長の目が光っていたから、常に己を律していなければならず、こんな空気が出てこないのも当たり前なのかもしれない。

だけど、だとすると、レスリーが求めているものがまさにこの匂いであるなら、それはエンリには無理な注文だと思わざるを得なかった。

その匂いは、奇妙なことにエンリの頭に激痛を引き起こした。うっかりするともどしてしまうのではないかというぐらい、エンリはその間、恐ろしいほどの痛みと吐き気に耐えなければならなかった。

実際、四日目の終わりには顔面蒼白になっていたようで、いち早く気づいたウィッティが駆けつけた。

「ほら、だから昨日だってもっとちゃんと食べるって言ったのに」

たぶん周囲にごまかしてくれるために、そういうことを高い声で言いながらさりげなく腕を支えてくれた。普段ならばそんな親切は跳ね除けるエンリだったが、さすがに限界だった。実を言うと、ウィッティからもあれの残り香のような匂いが漂ってきて、気持ち悪かったが、それでも寄りかけられるのはありがたかった。

本番まであと三日、それまでこれに耐え続けなければいけないというのは、気が遠くなるようだったが、エンリの誇りは、こんなところで辞退することを許しはしない。

なぜ、と、考えずにはいられない。なぜ、エンリはこのような体質に生まれて、しかもそれは、レスリーの目指すものと相容れないのか……。

部屋で休んでいると、ウィッティが香ばしい香りを運んで戻ってきた。

「はい、色々理由つけて取ってきた。野菜のローストぐらいなら食べられるでしょう？ 一応スープも持ってきたけど、気持ち悪くなるようなら心配しないで、あたしが飲むわ」

エンリは大して食べなくても活動できる性質<sup>たち</sup>だったが、野菜の焼けたシンプルな甘い香りには意外と食欲をそそられて、素直にいただくことにした。

「医者も呼べるって言われたけど、嫌なんでしょう？」

「うん。ありがとう。医者はいない」

「強情虫……」

ほかほかのジャガイモを口に含むと、すっかり感覚の麻痺した口内がふるえ、やがて、味覚を取り戻した。

「大丈夫だよ。別に具合が悪いわけじゃないんだ」

「どう見たってね、あんたみたいのを具合が悪いっていうのよ。これで、あれだけ動けるなんて信じられない……まあ、だからこそ皆、あなたがちょっと体力無視して無茶してるだけだろうって思ってくれてるんだけど」

エンリは肩を竦めた。

「いつものことだよ。無理もしてない。普通に踊ったらああなる」

「あなたって昔からそうなの？ 今度ロンドに聞いてやるわ」

ウィッティの話していた「十六歳の同級生」がロンドだと分かったのは三日目のことだった。すごい偶然、とはいえ世の中がたいがい偶然で成り立っていることには、エンリも薄々気づいてきている。そもそも発覚したのは、

「エンリは白黄系よね、って、間違ってたら正してね。お母さん、それとも、お父さん？ は、元々どちらの方なの？」

と訊かれたことに端を発していた。

「さあ。産みの親は知らないんだ」

さも、しまった、と言わんばかりの顔をされたので、もう少し説明をすることにする。

「昔は、サーカスの座長夫妻が親だと思ってたんだよ。でも、よく考えたらその二人とは全然似てないし、兄弟たちも皆ばらばらの顔してたし」

「そう……。そういえば、昔はサーカスにいたって言ってたわね。どうして、やめてダンサーになったのか、訊いてもいい？」

「別にいいよ。たまたま、何人も養子を育ててる人に引き取られたんだ。三年前。十六歳って言ったけど、それはその時にたぶん十三歳ぐらいだろうって年齢を決めたのを元にしてる。ちょうどそこには、同い年に見える子もいたし。それでサーカスを出て、一年前、そこも出てマーマのコネでダンサーにさせてもらった」

「……マーマ？」

「ああ、養母のこと。そう呼んでるんだ」

「ねえ、そのお家って、どこにあるの？」

エンリが答えると、

「ね、ひょっとして、その同い年の子どもって、ロンドって言わない？」

「……知ってるの？」

「知ってるわ、黒茶の優男でしょう？」

「……;あれで、意外とガタイはいいんだよ」

そういう経緯だった。

それからウィッティはますますエンリの世話に責任を感じるようになったようで、五日目にはすっかり、周りから二人一組と認識されるようになってしまった。年少組というわけだ。

その五日目には、地元の先住民ダンスグループと初顔合わせがあった。

人数は十人ほど、二十代と思しき若者と五十、六十頃の男たちで構成されていた。

普段は観光客相手に踊っているという彼らは、エンリたちのことを面白くも無さそうに見た。お互いにどこか相手のグループを見下している感じがして――またそれを察して更に空気が悪くなる、という具合で、あまりよいスタートは切らなかった。

それでも、意外だったのは、先住民グループの面々もレスリーにはそれなりに気を許し、敬意を払っているらしいということだった。何代か前に先住民の血が流れている、などと吹聴する白色にしか見えない変な男を、彼らがそうそう受け入れるとも思えなかったのに。

が、話し方から互いを見知った様子に気づけば、そうそう変なことでも無いと思えた。これまでも顔合わせや話し合いを既にしてきたなら、それなりに砕けた間柄にはなるだろう。心から信頼するには到底至らなくても。

本番の進行では、まず彼らがステージに立ち、入れ替わりにレスリー組が入るということで、レスリーはこの入れ替わりの時に一工夫にして、コラボレーションをやりたいのだと言った。

とりあえず互いの踊りを見ようということで、まずは本番通りの順番で、先に先住民グループが踊る。

彼らの踊りに、いわゆるところの音楽は無い。足踏みの音と咆哮そして手にした木の枝や葉がその役割を果たす。合間合間に、言葉らしく掛け声が節をつけてかかる。エンリは、周囲がそれなりの興味と感嘆を以って彼らの踊りを受け入れたのが分かったが、エンリ自身は大した感慨も抱かなかった。典型的な先住民舞踊に見えたし、他と多少違うから何だという程度には、身体が動いていない。それに、このスタジオで踊ることに大して乗り気でも無いのが分かった。あの匂いはしないのでありがたかったが。

拍手を以って終わると、今度はレスリーの指導するこちらのグループが踊る。

来るだろう吐き気から気を逸らすためにも、予めエンリは意識を少し外に置くようにした。うっかり踊りそのものに集中してしまうと、急に昨日のような痛みが来た時が怖かった。今まで以上に……客体的に、この集団を見る。

音楽は、アイラーツツアに生まれれば誰もが知っている民謡が歌なしで流れている。歌詞の内容は差別的なものだが、曲は親しまれたものだから、ということで採用されたそう。今のアイラーツツアの新たな一步を象徴させたいから、逆に先住民系の音楽は使わずに、その魂だけを表現したいのだという（めちゃくちゃだ、とは誰も言わなかったが、言わなかっただけなのか実際に皆納得してしまったのか、少しだけ気になっている）。本番では楽器の生演奏になるそう

だが、今のところは録音でしか踊っていない。レスリーの注文で編曲したのだろう、馴染んだバージョンとはかなり違うイメージの音だ。普通聞くのはギターや管弦の音だが、こちらは多分民族楽器を使っている。とくべつ先住民の民族楽器というわけでもないはずだ。

物悲しいメロディに、何かの胎動するような動きが被さる。

これは、蠢きだ——と、外側で観察するエンリの意識が呟いた。

先住民グループの踊りは、最初から最後まで、独特の厳かさを醸し出す騒々しさを持っていたが、こちらはあくまでひっそりと始まる。しかし激しさを内包する穏やかさなので、他のダンサーたちは結構、動きの習得に苦労していた。

蠢きはやがてうねりに変わる。うねりは、曲が進むにつれてどこかに収束するように——

ふいに気づいた。これは蛇だ。レスリーを頭……いや、むしろ変幻自在な舌として、とぐるを巻く蛇である。

そして思う。奇妙な話だが、レスリーはこれに気づいているのだろうか。もちろん、あれだけ流れに拘っていたのだし、意図的にこのように構成したに違いないのだが、だがしかし、そうとも言い切れない微妙さと力強さの不可思議な混在があり、それはどこか、レスリー一人の力ではなしえない形のような気がしたのだった。

エンリは踊りながら、一方でその蛇に見惚れた。ぎこちなさがもどかしい……思い切り、羽を伸ばして動かさせてやりたい、と思わずにはいられなくなるものがあった。

ふと気持ちを戻すと、踊りが終わっていた。天に乞うポーズで止まっている。

叩くように戻ってきた頭の痛みに、今までそれを忘れていたことに気づく。熱による痛みを完全に忘れたのは、この町にやって来て以来だった。あのいやな匂いは少し香りを残す程度にしか感じないから、たぶん今回は大して発生しなかったのだろう——皆緊張もしていただろうし。

観衆であるところの先住民グループは、手は叩かなかったが、明らかに顔つきが変わっていた。年配の一人が言った。

「レスリーさんよ。あんたの言うことが、今ので少しわかった気がする」

レスリーはひどく満足げに微笑んだ。

互いの技量を認め合えば、それだけでわだかまりは消える。だいたいそういうものだった。先ほどとは一転、和やかな緊張感の中で振り付けが始まる。

当日もやはり、雨の降らない曇りだった。

聖地のステージは、ステージと呼べるほどのものではない。聖地を背景としたただっ広い砂地に、石で縁取った空間が作られ、テントですら無い。テントは運営席にのみ使われている。

開会は午後一番——ダンスは、開会の辞の次に来る予定だから、午前中は会場の設営の手伝いと立ち居地確認をした。伴奏音楽の合奏（やはり雑多な民族楽器で構成されている）には皆で練習に立ち会ったが、ダンスのリハーサルはしなかった。聖地でのダンスは一度きりだとレスリーが主張したからだ。不安の声が出なかった訳ではなかったが、今更レスリーに本気で立ち向かう気は誰にも無いようだった。会場スタッフ全員に出された昼食はあまり美味しくなかった。

聖地は、やはり強烈だった。一見、ただの砂地であり、ただの岩石群である。景観としての珍しさや印象深さもそうだが、身体を内側から襲う茹だるような熱は町にいる時とは比較にならない。観光地としての聖地に感心する余裕など無かった。写真で見たままだとは思ったが。

ダンスは、あくまで余興だ。イベントの趣旨は歴史に思いを馳せ、過去を忘れないということであり、メインは偉い先生や聖地の管理委員たちの話である。

しかしダンサーたちにとっては、揺るがない本音として、その余興こそがメインであり、全てだ。——少なくとも、踊り終えるまでは。

そして、気づくと、もう本番は目前に迫っているのだ。

先住民グループがまず入る。

雷鳴のように咆哮が始まる。

足踏みが地鳴りのように高まり、拍動が、共鳴とともに、生まれる。

身体じゅうに描かれた文様が、彼らが交差するたび、個と個を分かちがたくする。

あっという間に、出来上がっていた——出現したものが、エンリには見えた。

そして理解した。彼らの踊りは、レスリーの目指すものとは、そしてエンリが属する世界とは根本的に違うものだ。これは、一つの劇であり、物語なのだ。この間見た時は全く浮かび上がって来なかったが、今のエンリには登場人物たちが見えた。人とも言いがたい不可思議な形の影だった。

本番の彼らのパフォーマンスは、あのスタジオでのやる気のない動きとは全く異質だった。聖地のエネルギーに、ダイレクトに反応しているのかもしれない。

あの匂いが濃く濃く漂っている。

刺激されて、ダンサーたちも興奮しだしている。

体験したことの無い感覚だった。身体の感覚が、あるようで、無い。無いようで、在る。頭の芯が、ますます麻痺したように、溶けるように、羽音のように振動している。

合図があり、自動的に身体が動き出す。

ダンサーたちはなだれ込み、初めは未だ踊る精霊たちを囲うように、しかしやがて囲まれ、も

つれ合いの末、混ざり合い、また分かれて、場所を明け渡された。

蛇が降臨したのだ。

エンリはその尾の先だった。

蛇体の先、あるいは頭よりも自由かもしれぬ部分を体現しながら、しかしエンリはあくまで、己に見える蛇を無心で写しとっているだけだった。

曲が進むにつれ、内側から迫ってくるものを感じ取る。

頭のどこかで、レスリーの言葉がフラッシュバックする。あなたの中に、開放されたがっている何かがあるのが見えるよ……どれほど踊っても、このままではいつまでも、それはあなたの中で鬱屈して渦巻いているんだ――

そして、出てきた。

天へと腕を伸ばして静に移った、その時。

世界の色がひっくり返り、雷が鳴り響いた。

戻ってきた色彩の中、誰もが夢から引き剥がされたように慌てている。

しかしエンリは一人動かずに見ていた。

ひよる長いドラゴンが、エンリから立ち昇り天に向けて頬ずりをするようにくねり、また昇っていく……

まさに上空で、雲が怪しげな唸り声を上げた。

初めの水滴は、エンリの鼻頭に落ちてきた。

怒涛の雨音が一帯を見舞った。

大音量の中、畳み掛けるようにあちこちで叫び声上がり、いつのまにか歓声に変わった。

エンリが、戻ってきた、時、どれくらい経過していたのか、分からない。

ただ、雨の中、客席――はっきり言って、今日初めて認識した――にぽつぽつと咲く色とりどりの傘と、ほうぼうと伸びざる青草のように、大雨の中跳びまわる人々があつた。ダンサーたちも無邪気に奇跡を喜んで大騒ぎしている。

しかしエンリは会場に背を向けて歩き出した。

聖地とされる岩石群の、ここからは見えもしないどこかの一角が何故か気になって仕方がない

。歩きながら、痛みも熱も引いていることに気づく。

代わりにあるのは、心の扉を叩くような、いくらか乱暴なぐらいの、しかし一切余計なもののない呼びかけだった。意味を持った特定の呼びかけではなかった。だけど呼びかけには違いない何かだった。

それに耳を傾けることを知れば、もはや痛みには変わらないようだった。多少の煩わしさと、それを圧倒する、悲しみのような妙な気分が支配するのだった。

ドラゴンは、もうエンリから去ってしまったのだろうか。

そんなことを思ったが、実のところ雨濡れて歩くうちに段々と先ほどまでの、らしくない高揚感が抜けてきたエンリは、急にそうしたことを考えるのに嫌気が差してきてしまった。

惰性で歩みは止めないながら、一体全体どうしてこんなことをしているのか、という疑問が頭

をもたげてくる。これではまるきりスピリチュアルだ。別に、ドラゴンが出てきたことは大した問題ではなかったが――そういうものの存在を、わざわざ否定してきたようなエンリでもなかった――、ダンスを通して初めて顕現させてしまったことは、何かレスリーの言う通りになったようで癪に障った。

だけど、まあ、熱っぽさはまるきり抜けてしまったし、どうでもいいか。結局のところ、エンリにとって大事なはその点であったし――そんなふうを考えていた矢先、目に飛び込んできた光景に仰天する。

雨が既に溜まり始めた暗い奥まった窪みに、場違いに輝く大きな塊があった。

よく見るまでもなく、一目でエンリは、あの蛇を思い起こした。

凍ったように立ち止まったが、気がつけばまた歩みを進めていて、近づけば間違いようもなく、それは巨大な、とぐろを巻いて尚エンリよりも大きな、虹色に燦然と輝く蛇だった。

目の前で音を立てて長く伸ばされた妖艶な虹色の舌に、餌となるべく呼び出されたのかとよぎり、あるいは生け贄にでもされたのかと一瞬のうちにいくつもの発想が飛び交う。

「いくつもの海を越えて辿り着いたドラゴンの娘」

蛇が喋った。

ゆらゆらと色の漂い変わる虹色の瞳を、エンリは目を皿にして見つめた。

「おまえのドラゴンがわたしを孕ませた。おまえをこの卵の褥にしてわたしは発とう」

エンリはまだ見つめていた。

そして、何を言われたかを呑み込み啞然とする。

「……は？」

声を上げるのを待っていたかのように、あざ笑うかのように、蛇は食らうようにエンリの腹めがけて突進し、その巨体でエンリの全視界を目も眩む虹の瞬きに染め上げ、そのまま奇妙な無重力感にずりずりとエンリを引きずり込み、かつ虹蛇の窒息しそうなエネルギー量に溺れるような錯覚を覚えさせながら、反対側から出て行った。

一瞬で還された眼前の世界に、自分が消えてしまっていたかもしれない、そういう得も知れぬ恐怖にぞぞっと襲われる。

ふらつく身体を抑えて振り返ると、ここを起点に見事な虹が、空いっぱい架かっていた。

いつのまにか雨は止んでいたのだ。

岩のずっと向こう側から、スピーカーを通した男の声が流れてきた。虹がどうのと言っている。口笛がいくつも吹かれたのが分かった。イベントは再開されたいらしい。

それらの音を認識しながら、エンリは呆然と知覚した。

何か、ここに、いる。

エンリの中に、蛇は卵を産み付けていったのだ。

## 二 カレイドスコープ

エンリは未だに、花の名前が分からない。

一年ぶりの家の前に立って、急にそのことが悲しく思われた。夏になっても、この辺りはさほど乾燥しないので花も色とりどりに咲いている。ママは花また花が咲くたびに教えてくれたのに、今咲き誇る赤や黄色を目にしても、一つの名前も思い出せない。

ここに来て初めての春は、その鮮やかさに目を丸くしたものだ。毎日毎日、飽きもせずに関心して、花を見ながら庭に座っていると、気がつくと一時間も経っていたこともある。そのくせ、教わった名前はすぐに忘れてしまった。そうか、今回はこの春を逃したのだ……。

花は好きだ。今のように夏真っ盛りだと、春よりは数が減ってしまうが、それでも色づいた庭は楽しい。淡泊な性格にそぐわず、エンリは色が好きだった。

サーカスの両親であるところの座長夫婦が、時折気まぐれで買ってきてくれたお土産の、更に気まぐれで兄や姉から回されたおさがりがいくらかはあって、その一つは カレイドスコープ 万華鏡 だった。サーカスにいた頃から今も持っている物と言ったらその、ちゃちで小さな万華鏡ぐらいだった。

くるくる回すだけで変わる、色に満ちた世界が面白くて仕方なかった。サーカスで使ったミラーボールも好きだったが、エンリひとりのものでは無かったし、何より日の光の中だと、暗闇の中での煌めきがまるきり嘘だったかのように白けて見えた。だけど万華鏡は、覗き込みさえすれば夢のような世界がいっぱい広がって、一度として同じ表情を見せることはなかった。あのサーカスの中で、エンリだけの数少ない所有物だった。

ママはそれよりもよっぽど立派な、望遠鏡のような万華鏡を持っていて、それにもガツンと衝撃を受けたものだった。ママはいつでも覗いていいわよと言ってくれたけど、エンリはなんとなく、ママの部屋に入るのは許されてはいても後ろめたく、ほんのたまにだけ、絶対に誰にも見られていない時間に限って、こっそりと忍び込むように覗き込んだ。

ママの万華鏡はアーティスト万華鏡と呼ばれるものの一つらしい。州都のデパートでいくつか見かけた。とても高かったが、もう少しお金が貯まったらどれか一つだけでいいから、買おう、と思っていた。

思っている、ではなく、思っていた、というのは、一旦州都を引き上げてママの家に戻ってきたから、しばらく資金繰りがどうなるのか分からなくなってしまったのだ。

ママから電話があったのは一週間ほど前のことだ。

実を言うと、電話をかけようか迷っていた。聖地から帰って来て二日目のことだった。

「あのね、エンリ……おまえ、何か、あったのではないかしら」

柔らかで細い声の、確信を持った言い方に、エンリは絶句した。

卵のことは当然、まだ話していなかった。しかしあまりにどうするべきか分からないので、相談をしようかと思っていた矢先のことだった。

ママには、そういうことが分かる、ということは、お金をもらって『<sup>ソウキョウ</sup>霊視』をしているぐらいだから、知っていた。それでも、不意を突かれると動揺するものなのだった。

「あのね、エンリ。おまえが、私の最後の子どもになるということは、分かっていたのよ。おまえさえよければだけど、帰ってらっしゃい。少なくとも今、おまえにはきっと、ここにいることがよく作用するわ」

受話器越しに頷いたのが、ママには分かったようだった。

ある程度の蓄えは、一応ある。アパートも引き上げてきてしまったから、家賃も当面は心配することは無いだろうが、州都の仕事には出づらくなるので、しばらくはあまり手をつけずにいようと思う。

予め予約されていた仕事を一つこなしてからこちらに来た。長距離バスで三時間あまり、市内バスで更に一時間近くかかる。

会社には、しばらく家の問題で田舎にいるから、もしも依頼があった時だけ連絡してくれと言ってある。持ち前の動きのよさで、この頃は時々、以前の依頼主から指名で出演を乞われることもあるのだ。帰ってくる前の仕事もその類だった。

生い茂る葉を掻き分けて扉の前まで行くと、凶つたようにこちらに開かれた。驚いた。

開けた方の Rond も驚いたようで、目を見開いている。

「ママが、エンリはいつまで突っ立ってるつもりだって言うから……まさか、本当に真ん前にいるとは思わなかった」

まじまじと見ながら言う。

エンリとしてはいささか心外だった。

「立ってたのは門の外だよ。ここまで来たのは今の今で、自分で開けて入るところだった」

駆け足さながらの台詞が飛び出してきたのは、少し緊張していたからかもしれない。というより、安堵のためだったに違いない。

Rond が、ボランティアで子どもたちを教えるのを滞在費代わりに、夏休みの間帰ってきているとは聞いていた。

一年ぶりの Rond は、全然変わっていなかった。エンリの大好きなヘーゼルの瞳は、変わらずまっすぐに見つめてくれた。

「まあ、とりあえず入りなよ」

頷いて、家に上がる。

ママの匂いがした。

「元気だった？」

エンリは少し考えてから答えた。

「まあ」

「ふうん。元気そうでよかった」

「そう」

ママは今日も温室にいるというから、まず先に部屋に荷物を置いてしまうことにする。

「前の部屋をそのまま使っていってさ」

大した荷物も無かったが、ロンドは手伝ってくれた。

エンリの部屋は蔦模様の壁紙に覆われていて、端に年代物の机が一つ。窓側にベッドが以前と同じ位置に置かれていて、上にはオレンジと桃色を基調にした古い星柄の布団キルトが、たぶん洗っておい

てくれたのだろう、きれいに整えられて敷かれていた。

この部屋の匂いも、そのままエンリを過去に連れ去ってしまいそうなほど変わっていないのだ

った。開いた窓から風が遠慮がちに入ってきて、草木の匂いと蝉の音を運んでくる。

とても奇妙な感覚だった。

さすがに感慨深く見渡していると——大して広くもない部屋だが——ロンドがふいに言った。

「エンリさ、どうして連絡くれなかったの？」

エンリはばつが悪くなった。

新居が決まったら連絡する、と言いながら、エンリはロンドに連絡を入れずじまいだったのだ

。」「しようとは、思ってたんだ。……するつもりだったんだよ。でも、ママに電話したらロンドに話したみたいなこと言ってたから、わざわざまた電話するのも何か、と思って」

ぼそぼそと言いながら、ロンドの反応がよくつかめないことに不安を持った。ロンドは時々そのようになる。突然、存在に膜がかかってしまって、エンリからはよく見えなくなってしまうような——

しかし、ロンドはゆるりと、しょうがないな、と呆れながらも愛おしむように顔を崩した。ほっとする。

「エンリらしいけどさ」

ママの所、行こう。と、部屋を出て行くロンドを、エンリは改めてじっくりと見た。

惚れ惚れするようなカラメル色の肌に、ふわふわのちぢれ髪。今は向こうを向いているが、その瞳の美しさをエンリはよく知っている。誰もが覗き込みたくなる透明なヘーゼル色。顔立ちはけして整っていない……はっきり言って、地味な造作だが、その目と穏やかな表情が、ロンドをとても魅力的な男の子にしていた。

ロンドは考えたことが無いようだし、エンリもこれまでは大した知識が無かったのだったが、今ではロンドの血筋を、考えずとも分析してしまうぐらいには、色々な人を見てきた。肌や髪色は西大陸のこくしょく 黒色 系だが、目鼻立ちは北大陸のちゃしょく 茶色 の系統だろう。だけどこの前間近で初めて先住民を見て、思ったのは——筋肉の付き方が、ロンドを思い起こさせる部分があった。だからそちらの血も入っているのかもしれない。

「エンリ？ 来ないの？」

「ん」

追って部屋を出た。

温室に入った途端、独特のぼやけた日光が視界を打つ。

温室といっても、本来の役目は大して果たしていない。今だって脇の扉や窓は開放してあるし、水遣りにしても、雨水を使いまわしているぐらいだ。ようはテラスなのだった。風雨を気にせずとも日の光の下にいられる、贅沢な空間である。

子どもたちの中には、ちらほらと知らない顔も混じっている。同年代は、そのうち気が向いた奴らがボランティアに来るようになるだろうが、今の時点では、この歳になるともう通っては来ない。高校での人付き合いや、勉強に付いていくので皆必死になるのだそう（天才児ロンドは、飛び級して尚この限りではなかったらしい）。

ママは、こちらは全く変わらない老婦人たちの顔ぶれと共に紅茶を飲んでいた。

懐かしい微笑みに、思わず涙ぐみそうになった。

「おかえりなさい、エンリ」

「……ただいま」

腕を広げてくれたから、エンリはゆっくりとその中に飛び込んだ。

抱擁も、ここに来てから知った、好きなものの一つだった。

「私にもちょうだいよ」

と他のばあさまたちにもハグをせがまれ、代わるがわる抱きつく。懐かしい、老人の匂い。昔は変な臭いだと思っていたのに、今は気持ちが安らぐ。

「元気そうだねえ」

「よかった、よかった」

「綺麗になったんじゃない」

独特の、ゆっくりとしたかしましさが立ち上がる。

「若い娘には都会もいいのかしらねえ」

「恋でもしたとか」

エンリは肩を竦めた。

「あら、本当に？ 恋を見つけたの」

今度ははっきりと首を左右に振った。

「なあんだ」

「まあ、まだこの娘には早いかしらねえ」

「あら、あたしがこのぐらいの年頃には、もう百戦錬磨だったわよ」

「ああ、エンリをそこらの女の子と、一緒にしたら、いけないわ！ 特に、あんたみたいなのは、ねえ」

どっと笑う。

相変わらずで安心した。エンリがここに来て知ったまた一つに、人間もまた老いたら弱って死んでしまうのだということがあった。それまでは、動物しか看取ったことがなかったのだ。一

昨年、ばあさまの一人アリーシャの夫、ロバートが亡くなった。

笑いが収まったところで、ママがまた口を開いた。

「今日のところは、ひとまずゆっくりとお休みなさい。その後のことは、明日からゆっくり考えたらいいわ。しばらくは仕事は入っていないのよね？」

「……今のところは」

「そう」

いっそう深められた笑みに、エンリは急に眠気を覚えた。今度こそ、本当に安心しきってしまったというか……

「そうよねえ、休まなくちゃ！ こんなバアサンたちの相手をさせてたら可哀そうだわ！」

「よく言うわ、自分が一番うるさいくせして」

ママの周りに集まってくるのは、好い人ばかりだ。これは外に出て痛感した。

ここは本当に、身体じゅうの力が抜けるほど、あたたかくて、心地よい。

ここまでエンリに付き添っていたロンドが朗らかに言った。

「じゃ、おれ、そろそろ戻るね」

これにはママが応えた。

「そうね、ロンド。ありがとう」

「あ、あとさ、ちょっと思ったんだけど、エンリも教えてみたらいいんじゃないかな」

エンリは眉を寄せた。

寝耳に水な提案である。

しかし、他の誰もそうは思わなかったようだった。

「あら、それ、いいんじゃない」

「私もいいと思うわ。エンリも教えるのね！」

おまけにママまで言い出した。

「よく言ったね、ロンド。実は私も、そう思っていたの」

エンリは呆気にとられて皆を見て、それからロンドを見て、またママを見た。

「……誰に。何を？」

「まあ、なんて文法的な問いかけなこと。もちろん、子どもたち……生徒たちに、勉強を、よ」

「……おれが？」

悪い冗談としか思えない。かつては文字すら知らなかったエンリである。

「そうよ。おまえが」

「エンリなら問題ないよ。おれが保証する。多少は忘れていたとしても、すぐに思い出さるうし。小さい奴らから教えてみればいいんだ」

エンリはロンドを睨むように見つめた。

「いいじゃん。おれみたいに、滞在費代わりだと思ってやってみれば、さ」

からかうように言うのだったが、そう言われると弱い。何もせずにいるのも心苦しいが、ママにお金を払うような仰々しい真似も抵抗があったのである。

少しの沈黙があって、ママが告げた。

「まあ、何にしても今日は休みなさい。疲れているでしょう」

洗面のまま顔いた。

ロンドはひらひらと手を振って生徒たちの方へ戻っていく。

卵は、今のところ何も変化は無い。

身の内にいることは分かるのだが、それだけだ。共生をしまして二週間、エンリはもはやこの感覚にも慣れてきてしまった。

本当はすぐにでもマーマに話そうと思っていたのだが、ロンドがいることもあり、夜になっても話せずじまいあった。きっかけを見失い、その後ズルズルと話さないまま日々を過ごすことになる。

翌日になると、実際に教えさせられることになった。夏休み中、ボランティアが少なくなるという実情もあったようだ。

あまりに幼いと逆に難しいだろうということで、十二歳の生徒を三人、あてがわれた。

勝気なマリーに、一見大人しくシャイけどなかなかのお転婆だというケイト、それによく二人と一緒にいる、少し幼いが優しいテオという、女子二人に男子一人。

十二歳といえば、エンリがここに来た歳とだいたい同じである。五つも違わないぐらいなのに、なぜか不思議と幼く見えた。

エンリが紹介された時には、三人はテーブルにはついていたものの勉強道具も広げず、まだお喋りをしていた。ロンドに言われると文句を言い言い問題集とノートを広げた。

ロンドは割りときささっと他の生徒のところに行ってしまったので、エンリは盛大に困ったが、表にはあえて出すこともなく、とりあえず無言で座る。

マリーがじっと見てきたので見つめ返すと、そのうち居た堪れなくなったのか大人しく問題を解き始めた。

エンリはテーブルの反対側から、それぞれの問題集を盗み見る。マリーとケイトは理科、テオは数学をやっている。答えは塾で預かっているものを渡されているのでそちらも確認してみて、なるほど、これなら何とか分からなくはない……と安堵した。

ふと、テオの書いたものが間違っていると気づき、ペンを持った手を伸ばした。

テオは驚き、怖がってさえいるような様子でこちらを見上げる。栗巻き毛が小動物のように揺れた。

エンリはその問題を初めからペン先でなぞっていった。初めの計算は間違っていない。途中で計算ミスがあった。そこに波線を引く。

手を引っ込めて元通り座ると、テオだけでなくマリーとケイトもエンリを見ている。

いくらか居心地が悪くなって身じろぎをした末、それでもまだ視線が外れないので、一言だけ口にした。

「……そこ。よく見て」

テオのノートを、女子二人も首を伸ばして覗き込む。

テオは慌てて腕でノートを隠すのだったが、少しするとエンリの言わんとすることに気づいたようで、消しゴムを取りだした。

そのような調子で、十分の休憩を挟みながらも三時間、過ごした。

「大丈夫だったろ？」

ロンドは笑ったが、エンリは曖昧に頷いた。まともにできたものだったか、自分では全く分からない。

「大丈夫だったって。あいつら、ちゃんと騒がずに勉強してたし、エンリの教え方も見たところ

良かったよ。エンリらしいなって感じはしたけどね」

その言葉には少しどころでなくほっとした。

エンリは、ロンドには……ママに対してもそうなのだが、無条件に認められたいと思ってしまう部分があった。

雛の刷り込みのようなものなのかもしれない。初めて親身になってくれた人たちへの信仰のようなものなのかもしれない。

仮にこれから先、ロンドとの縁が完全に断絶してしまうことがあったとしても――サーカスの家族のように、霧の中の存在になってしまうことはないだろう。そういう確信がある。

だからこそ、エンリは時々、ロンドが恐ろしかった。ママに対してそのようになることはないのに。

エンリはこの通り口数も少ないし愛想も見せないから、この塾でも好かれない人には好かれなかった。大体が、同年代の男の子や女の子だった。エンリの勉強が進むにつれて、そういう感じをあからさまに出されるようになった。

初めは、距離を置かれることには慣れていても、そういう棘々とした感じを向けられることはあまり無かったので、戸惑ったが、大して時を経ないうちに慣れてきた。ママとロンドに特別に扱われているのも要因だったのかもしれない。嫌味を言われることもたまにはあったが、正直、大して気にならなかった。誰にでも気に入られたいと欲するような生い立ちを、エンリは送ってこなかった。

だけど、どんな文脈だったか――どんな状況だったかすら覚えていないが、突き刺さったように忘れられない声がある。

「そりゃ、確かに……」

ロンドが溜め息とともに誰かに言っていた。

「エンリはちんくしゃかもしれないけど」

エンリは、たぶんそこにはいないはずだったのだろう。もっともロンドがそう言った時の気負いのなさからして、どちらにしろ大したことではなかったに違いない。その後が続いた言葉は、けして悪いものではなかったはずだ（しかしこれも覚えていないのだった）。

自分でもびっくりするほどエンリは、ロンドがそういうふうに、面と向かってではないにしろ、自分のことを呼んだということにショックを受けた。そんな明らかなこと――自分でもちんくしゃだと思う――で傷ついたことがまたショックだった。

それからというもの、そんな些細なことのせいで、エンリはどこかでロンドが怖い。

それまで、知っていたものの、そういうものだとして自然に受け入れていたロンドのそつのなさや、けして人に悪意や弱みを見せないところが、まるで突然牙を剥いた虎の児のように、恐ろしいものへと変わったのだった。

他の人に関しては、まるで気にならないもの――ロンドの、真意が、気になって仕方ないのだ。

ママの家に帰って来てからというもの、エンリは卵の、何か嘆きのようなものを感じ始めていた。少し前だったら、ひどい頭痛を得ていただろう、そういう類の声なき叫びだった。

何かを訴えているようですらあった。

ひょっとして、卵が割れて中から生まれようとしているのか……その場合、宿主となっているエンリはどうなるのだろう。無事で済むのか。よもや、内側から食われてしまうのではあるまいか。たしかそういう昆虫がいた。いや、あれは父親を食うのだったか……しかし父親がエンリのドラゴンであるというなら……しかしそもそもこの卵は蛇であって、虫ではない。

そんなことをぐるぐると、ある朝、子どもたちの勉強を見るという今だ慣れない仕事の一方で考えていたのだったが、とみに嘆きが最高潮に達し、その超音波さながらの声に頭を破られそうだと思った。その時、新たな動きがあった。

ごっくん。

そんな音が聞こえた気がした。

真っ青になった。

さすがに顔に出たらしく、生徒たちに心配された。

「心配ない。大丈夫」

ほとんど無意識に口に出しながら、心中大荒れであった。卵が喰った。何を？ いつのまに、孵っていたのか？ それとも、孵っていないのか？ というか、何を喰ったっていうんだ……

反射的にママの方を向く。ママは立ち上がって、来てくれた。

「マリー、ケイトにテオ。しばらく他の先生に見てもらいなさい……そうだね、カレン。願うするわ。エンリのは私が見るから」

視界の隅で、ロンドが心配そうに駆け寄ってくるのが見えたが、ママが手を挙げて制すると思いとどまったようで、視線をよこしながらも戻っていった。

この期に及んで、ママに何も言わないでいることはできない……そもそも、どうしてこんなことになるまで相談しなかったのだろう。非常に珍しいことだが、エンリは心の中で己を盛大に罵った。

居間まで来ると、ママは今だ放心状態のエンリを座らせてから、自分は台所に立った。

エンリのためにラベンダーティーを淹れてくれたのだった。

その爽やかな香りには、確かに、混乱した精神に浸透していく強さがある。

「エンリ。時間をかけてもいいよ。何が起きたか話してごらんなさい」

「……虹蛇に会った」

「まあ」

ママは目をぱちぱちとさせた。

「それは、いつ？」

「帰って来る前に、仕事で……ママから、電話が来る前。北の聖地で」

「まあ、まあ」

エンリが窺うように見ると、

「私は、妖精なら見るけれど、それでも虹蛇はお目にかかったことがないわ」

「……そうなの？」

「そうよ」

「妖精、って」

「そうね。見えるのよ。エンリには見えないのかしら」

首を振る。

「そうだろうとは思っていたけど、不思議ね。それでも虹蛇は見えたのだね……この土地に根ざす大いなるものが」

「すごく、でかかった」

「そうでしょうね」

「うん。それで……」

マーマは目元を細めて先を促した。

「その、<sup>ドラゴン</sup>龍が出たから」

少しだけ眉が上がるマーマ。

「虹蛇が、それで、なにか、おれのドラゴンが孕ませたとか、そんなことを」

「話したの？」

頷く。

「あら、まあ」

「それで、おれに卵を産み付けて行った」

さすがのマーマも絶句した。

「……それで、それから、どうしたの」

「さっき、その卵が何かを食べた」

「食べた？ って、何を？」

「分からない。身体の中で、食べられる何か」

「卵が食べられる何か？」

肩を竦めるしかない。エンリだって、そんなものがあるなら見てみたいぐらいだ。

「今、嫌な感じはする？」

エンリは首を振った。

落ち着いてくると、当初の衝撃も薄れ、そうしてみるともはや大したことではない気がしてきていた。数日続いていた嘆きも止んでいる。

「それならきっと、特に問題は無いとあっていいでしょう。こういうことに関しては、直感を信じるのが一番よい……おまえがそう感じている限りは、大丈夫でしょう。案外、おおまえの身体の中にあつた何か悪いものを食べてくれたのかもしれない」

マーマがそう言うならば、そうなのだろうとエンリは思った。そう願っていた。

「エンリ、さっき、ドラゴンと会ったと言った？」

「会ったというか……出てきた」

「出てきたって？」

「文字通り。おれの身体から、出てきて……それで、天に昇って行って、雨を引き起こした」  
言葉にしてみると、自信を無くしてしまう内容だった。とても嘘くさい。

「……それで、虹蛇を……この大地を孕ませた、と」

「それは知らない」

マーマはしばらく考え込んでいるようだった。

「エンリ、私は……いえ、おまえも。私たちは、侵略者の血を引いているわ。私は昔、それが耐えられなかった。先祖が傷つけ犯した地に我が物顔で居座っているということが、とてつもない罪に思えたわ……若さゆえの潔癖さと言えるかしらね。それで、おとぎ話で憧れていた、かつての宗主国に渡ったのよ」

初耳だった。意外という思いで聞いた。

「色々あって、魔女の修行を積むことになってね。魔女といっても、悪い魔女では無くてね、……まあその話は、またにすればいいわね。でもね、とにかく、それでもここに帰ってきてしまった。あそこが祖先の美しい故郷で、私が本来属する所だとしても、私の故郷はこの国で、この大地でこそ私は安らかになれたの」

滅多にないことに、マーマは語りながら、自分の考えに没頭していた。

「それでも、この大地の象徴たる虹蛇を見たことは私には無かった……けどおまえのドラゴンとは交わり、その種をおまえに産み付けた……それは、どういうことなのだろうね」

「マーマ」

「うん？」

「マーマはいつも、おれはドラゴンだと言ってたけど」

「そうね」

「おれ、自分のことは女だと思ってたんだけど、違うの？」

マーマはぱちくりと瞬きをした。

それから破顔した。

「なるほど！ そういう考えもあるわね」

くつつつと笑う。よほどおかしかったらしい。

「心配ないよ、エンリ。おまえはちゃんと、女だよ。おまえはドラゴンかもしれないけど、ドラゴンはおまえではないわ」

よく分からないことを言う。

「エンリ、おまえは カレイドスコープ 万華鏡 が好きだね。ドラゴンは、あの中で一際輝く珍しいダイヤモンドのかけらのようなもの。万華鏡を回した時の世界に、強く反映されることもあれば、ほとんど見えないこともある……そういうものよ。おまえはその血を通して、一際大きな粒を受け継いだけれども、それはおまえの一部であって、おまえそのものではない。そしてドラゴンは、おまえだけの中に存在しているわけでもないの」

じっくりと考えてみる。分かるような気は、しないでもなかった。

「マーマが……」

「うん？」

「おれがドラゴンだと分かって、引き取ろうと思ったのは、ママにとってのドラゴンがダイヤモンドだったから？」

ママの微笑みは穏やかだった。

「そうだとも言えるし、そうでないとも言えるわ」

次の言葉を待つ。

「私は常に、一番よいと思われることをしているけれども、私自身の思惑を持って行動していることも確かよ。私はこの光の地に家を建て、子どもたちを育ててきた。そして守ってきたつもりよ、この場所を……いずれ旅立っていく子どもたちや、親たちを。だけど人の命には限りがあるわ。できることならこの場所を、ふさわしい人間に譲り渡したいと思ったのよ」

エンリは戸惑ってママを見た。

「エネルギーというものは、人知を超えたものだけれど、同時に歪みやすいわ。そしてそれは、人の世の理に従ってはいは防げない。そういうことが分かる人間でなければ、私は安心してここを明け渡すことはできないと思ったの。おまえを一目見て、この子だと思ったわ。だけど私には、鎖にがんじがらめに囚われた哀れなドラゴンに思えた。もしも私が慈善家だったら、おまえを引き取らずに、あのサーカスの児童労働の実態を調査するよう、行政に訴え出たでしょう。だけどそうはしなかった。あの時私の直感が告げたのは、おまえを私の許に連れてくることだけ」

そこまで言って、安心させるようにエンリの手をぎゅっと包んだ。

「私の思惑に、おまえが従う義務は無いわ。誰にも、絶対の運命は語れない……かの釈迦牟尼シャカムニでさえ、これぞと思った後継者には先立たれてしまったというわ」

「ママ」

「帰ってきたおまえを見て、私は安心したのよ。一つ、殻を破った……また一つ、開放されたのだね」

エンリには何も言うことができなかった。

ママの突然の告白に戸惑っていたし、見当違いの重荷を課せられたような感覚も味わっていた。

「戸惑っているわね。当然のことよ……あまり考えすぎないでちょうだい。虹蛇からの授かりものについても、しばらくはあまり深く考えなくてもよいでしょう。また何かあったら言いなさい。どれだけ力になってあげられるかは分からないけど、私はいつでも、おまえの味方よ」

数日後、エンリは月経が遅れていることに気づく。普段だったら、そろそろだなという兆候のようなものを感じるのに、それもないので、あまり気にしないながらも訝しんでいたが、更に数日経って、思いついた。

ひょっとして卵（もしくは、孵化した蛇）は、卵子を食べたのではないだろうか。

卵が卵を喰らうなんて、ブラックジョークとしか思えないが、その考えは割りとしっくりと来るものだった。

もしもそうだとしたら、あの嘆きは、死にゆく卵子を悼んでのものだったのだろうか。だとすると、少なくともエンリの感覚からすると、食べるというのはおかしいのだが。

これを証明するように、この時からエンリは月経を迎えない数年間を過ごすことになるが、この時点ではぼんやりと思索するばかりであった。

勉強を教えることは、戸惑いや試行錯誤の連続ではあったものの、すぐにエンリの日常の大部分を占めるようになった。

どうすれば、うまく……しっかりと、分かってもらえるようになるのか。エンリは初め、ロンドがどのように教えてくれたかを思い出しながら考えていたのだが、じきにやめた。

三人それぞれの特性がまるで違ったから、同じ教え方ができるはずもなかったのだ。マリーはせっかちだが、じっくりと問題と向き合わないとちゃんと理解できないタイプだし、ケイトは呑み込みは遅いが一度納得すれば速い。テオはマイペースで、自分一人で大抵のことができたが、時々単純な計算ミスや考え違いをする。

ちらちらと見てみたところ、ロンドもエンリに対するのとは違ったアプローチでそれぞれに教えているようだった。そもそも、エンリの場合は読み書きの練習を勉強と兼ねてやっていたところがあったので、そんな特殊な生徒と他とを同じように扱わないのは当たり前と言えは当たり前だった。

エンリが教えている時の三人は、今までとは段違いに大人しいらしかったが、それでも一週間もすると慣れてきたのか、扱いに困るような駄々や怠慢も見せるようになってきた。

勉強の時間など実際、朝の三時間程度なので、エンリが見ていられる時間は少ない。

しかしロンドなどは一日中年下の連中の面倒を見ている。長期休みの間、ここは実質託児所と化すのだ。

ロンドのようにはいかなくても、勉強時間以外に生徒に関わる時間というものも、自然、増えてきた――なんといっても、仕事があるわけでもないエンリは、家のことを手伝っているのではない限り、以前のように勉強をするか、ぼうっと人の会話や庭を観察しているぐらいしかやることがなかった。慣れてきた三人組を初めとする子どもたちが、段々、暇そうなエンリにからむようになってきたのだ。

サーカスでは一番年下だったし、ここでも大して自分より年下の子どもとは関わることはなか

ったから、中々不思議な感じがした。何かいさかいが起こるたび、それぞれエンリに自分の言い分をぶつけに来るといのも新鮮だった。気の利いたことなど言えるエンリではないから、割と拍子抜けしたような、物足りない風情で去っていくのだが、意外と毎回、それでもエンリの許に話しに来るのだった。

たったの四つしか違わないのに、こんなふうに思うのはおかしいのかもしれないが、エンリには、彼らのような時期というのが無かったように思う。色々なことを思い、人に伝えようとし、それゆえにぶつかりもする。興味深いと同時に、素直に羨ましかった。

彼らと関わっていると、ロンドがエンリを教えることに熱中したことも、理解できる気がしてきた――彼らの成長や変化に、自分が関わっていくのだという実感は、悪いものではなかった。エンリにはこの三人ほどの面白さは無かったと思うが、エンリはたぶんロンドの初めての本格的な生徒だったから、それでも楽しめたかもしれない。

そして、醜い部分があるとしても、生徒たちのことが、エンリは本当にかわいかった。人間に対してそのように感じたのは初めてだった。だから、ロンドがエンリのことを「ちんくしゃ」と評したのも、今も心が痛まないではないが、要するに、そういうことなのだろう……本当に、大したことはなかったのだ、ロンドにとって。「ちんくしゃ」だとして、ロンドの中で、それはエンリを損なうものではなかった。分かっていたことだが。

それでも、帰ってからまだ三週間もしていない頃に、会社から、依頼があったと電話があった。レスリーからの依頼だった。

レスリーに気それほどに入られたとは思っていなかったので意外には思ったが、請けた。ミュージックビデオのバックダンサーで、一週間後から西の州都に三日間。交通費は出ないが、その分も補えるように給与を高くできるようにレスリーが調整してくれるということだった。

「気に入られたな」

と、エンリの担当社員であるマークは言ったが、エンリは

「はあ」

（と、一応電話越しであるので反応は返したものの）首を傾げるばかりである。しかし、駆け出しのダンサーに対しては破格の待遇だった。

金額の交渉は任せる旨を伝えた。

その仕事のことを話すと、三人は目を丸くした。

「エンリ、ダンサーだったの？」

頷くと、マリーが目を輝かせて、

「じゃ、エンリ、あたしたちのダンス見てよ、そんで、何か言ってよ！」

エンリは眉を寄せる。

ケイトも、

「そうだね、そうだ、それ、イイ！ うわあ、やったねえ」

いまいち話に付いていけないエンリが、

「何」

と一言発するや、

「夏休み明けにね、始業式で発表するの」

「うちのクラスの女子は、みんなで踊るんだよ」

「振り付けはうちらがやってんの」

「来週からみんなで練習するんだけどー」

要は、学校でたくさんの生徒の前でダンスを披露する機会があるらしい。言われてみれば、二人でくるくる何やらやっていた。

「振り付け？」

「うん。だからエンリ、見て」

エンリは少し考えた。

エンリは自分でダンスをデザインしたことはなかった。いつも言われた通りに踊るだけだったので、自分たちで振り付けを考えているというのには感心する。

「後でなら」

「ええー。今見てよ」

「今見ればいいじゃん、なんでよう」

「今は、勉強。どうせ、大したことは言えないよ」

しかし実際には、一発で振り付けを全部覚えて美しく踊ってみせたエンリに二人がいたく感激したため、ついでとばかり動き方のアドバイスをして、更にはより滑らかで二人にも動きやすい構成の提案をもすることになった。

出発までの一週間、午後は延々とこの二人に付き合わされることになったが、そう悪いものではなかった。

エンリにとって、踊るという行為は全く意識せずにやってきたものだったので、いわゆる「勉強」を教えるよりもずっと新鮮で、興味深かった。

たとえば、二人は、エンリの指先の動かし方などを尋ねてくるのだ。そんなもの、言われるまで動かしていたことさえ意識していなかった。なんとか再現してゆっくりやって見せてもよく分からないと、見せ方だけでなく、どう言葉に表せばこいつらにもわかるか……そういうことを、自分の無意識に探りを入れつつ考えることになる。初めに動いているのはどの指のどの部分で、支点になっているのはどこか……など。功を奏すこともあれば、結局全く身に付かずに終わることもある。

これが普通の感覚なのかと、目から鱗がばらばら落ちるようだった。他のダンサーたちは、あるいはこのような状態からスタートしたのだろうか？

気がつけば、マリーとケイトだけでなくほかの女の子たちも何人かこのダンス講座に加わるようになった。二人はよい顔をしなかったが、エンリは気にせず誰にでもアドバイスを遣った。

「エンリが踊ってるところ、初めて見た。驚いた」

とロンドは夕食の席で言ったが、温室の他の面々も同じように言った。ロンドのように世間話

ばく言われることもあったが、やや興奮した面持ちで褒めちぎられることもあり、何か今まで見せてこなかったことを責められているような気持ちにさえなったぐらいだった。別に理由があった訳でもなし、機会が無かったから披露しなかつただけなのだが、予想外に大きな反響は意外という他無かった。ダンサーや依頼者から認められるのとは全く違う嬉しさがあった。

エンリが仕事に行っている間に、ロンドは発つことになっている。夏休みはまだあるらしいが（大学生の休みの時期というのは小さい連中の休みとは違ううえ、だいぶ長い）大学の友だちの家を訪ねがてら、あちこちに行くつもりなのだそうだ。

大学の友だちと言えば、そういえばウィッティのことを訊くのを忘れていた。しかし今更だし、いいか、と思って結局何も言わなかった。

「今度東の州都に来る時は、絶対に連絡するんだよ」

エンリの出発の時、ロンドのその言葉にエンリは頷いたが、

「本当に？」

と返された。どうも信用を失ってしまったらしい。

「本当に」

請けあったが、やっぱり信じてくれなかったのか、笑った。

「今度は連絡先もちゃんと分かるわけだし、おれからもたまには電話するようになるよ」

エンリは肩を竦めた。

「じゃ、行ってらっしゃい。またな」

「うん」

他の皆とは三日後にはまたすぐに会うので、ちゃんとお別れをしたのはロンドとだけだ。

さらに一ヶ月もすると、ウィッティから電話が入った。

聖地以来だった。

「なんで連絡くれないのよー」

ロンドと同じようなことを言った。もっとも、こちらの方がいくらかふてぶてしい。だけど嫌ではなかった。

近況を尋ねられたので、ダンスを教えていることを話した。

前回のレスリーの仕事から帰ってきてから、女の子たちの要望とママの勧めもあり、正式にダンス教室と銘打って教えていた。今は、マリーが持ってきたミュージックビデオを基に、模倣半分、創作半分で週に一回、今のところは日曜日に時間を設けている。レッスンは行き当たりばったりで構成していたが、このごろはグループでのフォーメーションも工夫したりしている。

最近になって母親たちからも要望があったので、来週からは子どもたちは学校に行っている間に大人にも教えることになっていた。

今は庭でレッスンをしながら温室の窓硝子を鏡代わりに使っているが、そのうちは町のスタジオでも借りようかなと思っている。

そこまで詳しく話したわけではないが、ウィッティは興味を引かれたようだった。

「今度のロング・ウィークエンド四連休にお邪魔してもいい？ あんとロンドのママにも会ってみたいし」

ママに相談するととても喜んだので、来てもらうことになった。

そうしてその二週間後にはウィッティが来たのだった。

考えてみれば、知人がエンリを訪ねてくることなど初めてだ。というか、そこまでの友人自体、いたことがなかったし、そもそもこの家の外に友人をつくる機会もなかった—エンリの性格では。ウィッティが来ることに、ママが喜んだのも道理というものだった。

そういうわけで、エンリは少し浮ついた気分でウィッティを迎えたのだが、ウィッティには伝わらなかったようだ。

快活に、まるで場違いな妖精のようにバスを降りるなり、

「久しぶりねえ！ 元気だったあ？」

と抱きついてきたが、次にはエンリの顔を見て、

「もう少しぐらい、嬉しそうな顔をしなさいよ」

と文句を言った。

エンリは肩を竦めて、少しだけ理不尽に思ったが、同時にちょっと、楽しかった。

ママもウィッティも、お互いをとても気に入った。二人がたくさん、喋って、笑っている間、エンリはじっと耳を傾けていた。

ウィッティは、小さな頃に好きだった絵本の作者がママだと知り、とても興奮していたが、同時にエンリを詰った。

「なんで教えてくれなかったのよ！」

「はあ」

ママは楽しげに、声を上げて笑った。エンリにこのように接する同世代の人間は、今までのところいなかった。

ウィッティは意外と、よく喋るし人に喋らせる割には、自分のことはあまり話さないのだったが、ママとの会話で少しはウィッティのことも分かった。

高校の途中で一年休学して、<sup>バレ-</sup> 国中を一人で旅したこと。ダンスは古典を幼い頃からやっていて、大学に入った年の夏休みを利用して、あの聖地のイベントに応募したこと。兄が二人いて、そのうちの若い方は結婚していて、姪もいること、など。

「そういえば、ロンドに、ここに来るのよって言ったら」

くすり、とウィッティは少し意地悪げに笑った。

「珍しく、あまり面白くない、という顔をしていました」

「あら、あの子が？ それは本当に珍しいわねえ。そつのない子だから」

「ね、そうですね！ あたしも、それでちょっと、鼻を明かしてやったような、妙に得意な気分になっちゃって。あ、すみません、こんなこと言って」

「いいえ、いいのよ。今年の夏はあの子もここにいたのだけれど……どうも、やっと子どもらしく……というよりは、もはや青年らしく、と言った方がよいのかしらね？ 人並みの悩みや苦しみを持つようになったのかしらという感じがしたわ。相変わらず、表には出さないし相談してくれる訳でもないのだけど」

この会話を、エンリは意外という思いで聞いた。相手によっては、ママもそのようなことを話すのだということも驚きだったし、ウィッティのようなロンドの見方というのも新鮮だったし、二人がこんな会話を交わしていることが不思議だった。

「ロンドって、エンリに対しては、何というか、ちょっとシスコンっぽくなるようなところ、ある気がするわ。前にもね、あたしがエンリと仲良くなったって言ったら、微妙～な感じ、出してたもの」

ママがまた声を上げて笑った。

エンリは首を傾げる。

「そうね。エンリが来たことは、ロンドにとっても、良いことだったわ。あの子は、あれで、不器用なところがあるのでしょうか。私はずっと、あの子に関してはどこかで、やってあげられるべきことをやってあげられなかったんじゃないかって、思っていたのだけど。エンリと一緒にいるあの子を見て、大丈夫ねって思ったのよ」

しみじみと語るママは、エンリをますます混乱させた。シスコンだとか、不器用だとか。どれもロンドに当てはまる言葉には思えなかった。

話はそのまま塾の話に移って行ってしまって、それ以上ロンドについて話されることはなかったが、エンリの心には深く残る会話となった。

ウィッティは二泊三日の滞在をして帰った。

土曜日には町にも出たが、あとは少しだけ住宅街を散策したぐらいで、基本的には温室や庭

でゆっくりとした。

日曜日には、子どもたちのダンスレッスンに参加した。

初めこそ、綺麗なお姉さんの登場にもじもじとしていた少女たちだが、ウィッティのあけすけな感じにすぐに慣れて、なついた。生徒にまじって踊りながら、時々子どもたちにアドバイスをあげたりしていて、さすがだとエンリは感心した。

子どもたちを見送りながら、エンリは訊いてみた。

「ウィッティにも、あんな頃があった？」

「んー……どういう意味で？ そりゃ、誰にだって小さな頃はあるでしょうよ」

「踊れない頃」

「ああ、そっか」

ウィッティはエンリを振り返った。

「あんたにとっては、あの子たちぐらいじゃ、踊れてることにはならないんだ」

「んん」

エンリは首を傾げる。

「あんなふうに、身体が動かないのは普通？」

「まあ、そうねー……あたしは、どっちかといえば動く方だったけど、あんたの目には、あの子たちと大差ない風に映ったかもしれないわね」

「そうか」

「不思議？」

「まあ」

「ふうん。あたしにしてみれば、あんたの方が、不思議よ。いくら生まれた時から踊っていたとしても、だからってあんなに動けるようになるのかしら。鳥が飛ぶように踊るのよね、あなたは。世界の叡智が結集したような動き方を生まれながらに知ってる感じ。神様って不公平だわーって言いたくなる。まあ、でも」

ウィッティはにやりとした。

「あんたはあんたで、普通の人間の感覚というものを、学ばなきゃいけないよね。そのへんなら、あたしの方が教えてあげられるし、あたしやあの子たちもあんたの技を盗んだり、習ったフィフティ・フィフティりすることはできるわけだから、まあ、五分五分 なんだと思うことにするわ」

エンリはしばらく考えてみた。しかしすぐに、何を考えているのかすらよく分からなくなってきて、結局、とりあえず頷いてみただけになった。

ウィッティが来てから、何か実感として、自分がこの家で生きていくのだなという感じが鮮明になった気がする。

ママがいて、エンリは子どもたちにダンスを教えていて、一応勉強を教える手伝いも続けているし、時々は依頼が入れば出張で踊りに行く。それで、時々ウィッティのように、エンリを訪ねて来てくれる人もいるだろう。ロンドもまだ当分は、たまには帰ってくるはずだ。今は大したお金になっていないけど、そのうちはここにも、ダンスでこの家と塾の生活を、ママの

作家業や霊視のように支えることができるようになるといい。

まだまだ若いという自覚があるエンリだが、それでもより年少の子どもたちに近く接しているとそのエネルギー量には圧倒される気がする時がある。その波動に触れた時、エンリの中に今だ居座る虹蛇の卵も喜ぶのが分かる。

この卵が、結局これからどうなっていくのか、エンリには皆目見当もつかない。いずれは孵化するのだろうが、その時エンリの身に何が起こるのかも全く分からない。

しかし正直、既にあまりにエンリの一部になってしまって、もはやあまり気にかからなかった。

そうしたことも含めて、エンリにはこの、マーマの家での未来が見えてきている。そしてその未来を、今までにない気負いのなさで、望んでいた。

## 三 ロンド

エンリが州都に来ているという。携帯電話に連絡を受けた時、ロンドは友人たちとパブにいた。しかし割と近くにいるらしいので、まだそう遅い時間でもなかったから来るかと誘うと、分かったと言った。

どうせなら来る前に言えばいいのに、こういう妙なところで遠慮するのは今だに変わらない。それでいて、言われた通り律儀に、来るたび連絡はしてくる。

ロンドは席を立った。

「友だちが来るから、迎えに行ってくる」

そう長くない時間で来るはずだ。

皆、知らない誰かが来るからといって嫌な顔をする連中でもない。元々電話をするのに話の輪から外れていたこともあって、ロンドはスムーズに騒然たるパブを後にした。

外に出るとひんやりとした夜気に包まれた。冬が近づいているのだ、そろそろ寒い。通りは明るく、賑わっているが、ロンドが店内でうっすら掻いた汗はみるみる引いていく。

小さな楽団が、たぶんアマチュアだろうに、隣の店から窓越しに、バイオリンを中心に据えて、中々見事に牧歌的な音色を響かせている。

エンリと会える。素直に嬉しい反面、どこか複雑な気分になる。なんだろう、後ろめたさのようなきっかい奇怪なものを覚えている。

エンリは、実際、初めて会った五年前から大分変わったと思う。見た目の印象は段違いで、初めは男か女かも分からない、言っては悪いが、みずぼらしい風体だったのに、いつのまにかふくよかな女らしい身体つきになり（相変わらず痩せてはいるが）、カサカサだった肌は今しっとり艶やかで、固くいかにも荒れていた鼠色の髪も今はふんわりと長いウェーブを描き、どこか風に揺れる小麦畑を思い起こさせる――これは一月前の印象だが、おそらくそう変わっていないだろう。昔エンリをばかにしていた男子が、この前久々に塾を訪れ、エンリを目にして驚いていた。家を出た時点で、既に今の感じに近くはなっていたが――ここ二、三年ほどで一層、やわらかく――また違う言葉を使えば、魅力的に、なったと思う。どこかビスクドールのような浮世離れた雰囲気さえ醸し出す、そういう、女の子、になってしまった。

通りの向こうを歩く、見覚えの在る小さな影が、せわしない人の波の中、ぼうと光ったかのように視界に飛び込んできた。

「エンリ！」

ロンドは手を大きく振った。

本当は、声を出す必要も、そもそも店の外に出て待つ必要も、無かったのかもしれない。どうもロンドは、エンリ相手だと過剰なおせっかいをしてしまうきらいがあった。

エンリは少し眉を動かすだけで特に反応もせず、しかし確実にこちらに歩いて来る。

思った通り、前と大して変わっていない。黒いジーンズにすっぽりとした薄手のパーカーを

羽織っている。

「久しぶり」

声をかけても、大して表情も変えず、ただ肩を軽く竦めてみせた。

こういうところは、本当に変わらない。エンリの無愛想さに行き会っていると、ほっとして肩の力が抜ける気さえする。ひどく馴染んだ静けさなのだ。

「飲んでる？」

とエンリは訊いた。

「ちょっとね」

エンリはざるだが、ロンドは割りと弱い。だからいつも、少し気分が良くなる程度で止める。

「ふうん」

「元気だった？」

「まあ」

「仕事はどうだったの」

エンリは少し首を傾げた。

「ふつう？」

こういうところも、本当に変わらない。頭は悪くないのに、言葉を操るといふ方向にはちっとも発揮されないらしい。

「そっか。ま、とりあえず入ろうか」

エンリは頷いた。

熱気を縫って友人たちの元へ戻っていると、まず目ざとく気づいたのはウィッティだった。

「あー！ エンリだあー！」

跳び上がってエンリに突進してくる。そのままの勢いで抱きついた。

「やだー、久しぶりいー。何、友だちってエンリのことだったのお？ なんて言ってくれなかったのよ、このオ」

既に出来上がっている。

ロンドはそらっとぼけた。

「あれ、そういえば二人って知り合いだったっけ」

「ウィッティ……酒臭い」

「あんたね、久々の再会なのに第一声がそれ？ まったく、相変わらずなんだからーア」

ロンドの知らないところで知り合っていた二人だが、どういうわけか、ウィッティはエンリを異様に気に入ってしまったらしい。全くタイプは違う二人だし、エンリも格別、愛想を見せるわけでもないの、実際、よく分からない。しかしエンリも、嫌がっていないということは、一応、相思相愛ではあるのだろう。電話の頻度で言えば、ロンドよりもウィッティの方がよほど高そう。

女同士の友情なんて、概して唐突で謎なものではある。ただ、まさかそれがエンリにも当ては

まるとは……というのがロンドの偽らざる本音であったし、よりによってあのウィッティと、というのも驚きだった。

大学に入って初めての夏休み、たしかまだ始まったばかりの頃だったと思う。マーマの家にボランティア教師も兼ねて帰省していて、ウィッティからの突然の電話にはいくらかドキドキしたのを覚えている。男なら誰だって、一度ならず彼女を意識する。ウィッティはそういう女性だ。今だって、酔ってべたべた触られたりしたらやっぱり、平静ではいけない。

しかし開口一番言われたのは、

「ねえ、エンリに会ったわよ」

という、聞き間違いにも思えた言葉だった。

この時、ロンドはエンリと一年近く連絡を取れていなかった。

新しい住居が決まったら連絡をくれると言ったのに、くれなかったのはエンリだ。しかしマーマには連絡が行っていたからいつでも訊けたし、マーマだって、教えておこうか、と初めに言ったのだ。

だけど、ロンドはらしくもなく意地を張り――表面上、朗らかに笑ってはいたはずだが――いや、エンリがどうせ連絡くれるはずだから、それまで待つよ、と断った。

普段、何に対してもあまりこだわりを見せぬロンドで、マーマをして

「おまえほど手のかからない子どもはいなかったわ。今まで、一人もね。あまりに昔から物分りが良くて、大人びていて、逆に不安になってしまいそうよ」

と言わしめたほどだったが、エンリに関しては少し違った。

ロンドはエンリの教師だった。マーマが連れてきた、同い年であるらしい貧相な子どもを二年間、つきっきりで育てた。そういう自負がロンドにはあった。エンリに関しては、誰よりも、マーマよりも分かっている、近くにいるとも思っていた。

ウィッティからの電話を受けて、ロンドは割と無様に衝撃を受けた。

一年間何の音沙汰も無かったことに結構傷ついていて、自分が知らない場所で、知らない間に他の人と新たな関係を築いていることを突きつけられたのだ。それも、よりによってロンドが密かな憧れを抱く相手と知り合って、しかもウィッティの口ぶりからすると、それなりに親密になったようだった。エンリがそう簡単に心を開くタイプではないことを知っていたから、よけいに衝撃だった。なんとなく、敢えてエンリにウィッティのことを訊ねることもしなかった。どこかでエンリが言ってくるのを待っていたのかもしれないが、そういうことを一々報告するようなエンリではもちろん無い。

しかしそれも二年近く前の話だ……その割には、未だに消化できていないのだが。

「おいロンド、その子があれか、おまえの、きっかけちゃんか」

タックが身を乗り出してきた。タックは面長の黄色で、細長い目を更に猫のようにしてにやにやと話す。今年に入ってから、天然パーマを隠すように丸坊主になった。ここにいる面子は大体そうだが、大学一年目の共通科目を共に学んで以来の友人だ。

「ああ、うん。そう、エンリだよ。そうだな、紹介……」

「おーい、エンリちゃん！」

タックはロンドを遮るように大きく声を上げた。

エンリはウィッティを羽織ったまま、胡散臭げにこちらを見た。

「会えて嬉しいよ、ちょっとほら、こっち来てよ、その酔っ払いも引きずってきていいからさ。あんたのことはロンドから聞いてるよ。会ってみたかったんだ」

別に酔っ払っているわけではない。タックはこういう男だ。

エンリは少しの黙考の末タックの許へ来た。

「なんだ、かわいいじゃん、なんかもっとへちゃった感じのひねくれた子を想像してたよ」

「おい、誰もそんなこと言ってないだろ……」

若干慌てつつ文句を言う。

「だから想像って言ったろ。かわいいならかわいって言うだろ、普通。そしたらそういうイメージになったのによ、こいつ言わなかったんだもん。無口で無表情って言われたらそりゃ、そういう想像になるだろ、俺のせいじゃねえよ。あ、エンリちゃん、なんか飲む？ つかとりあえず座ってよ」

しかしエンリは座らなかった。代わりに一言、

「あんた、誰？」

傍らでウィッティがふきだした。耳元で酒臭く声を上げられて、エンリは眉をひそめてウィッティを睨んだ。

タックはさすがにその反応は想像していなかったようで、固まっている。たぶん、ぶっきらぼうな物言いと、今では女の子らしくなくなってしまった外見とのギャップにも戸惑っているのだろう。

。

「やァーだ、エンリってばやっぱりサイコー」

タックはこれで妙に繊細なところがあるから、ロンドはフォローを入れてやることにする。

「エンリ、こいつはタックって言って、おれの大学の友だち。ちょっとうるさいけど、そんなに悪い奴じゃないよ」

エンリは大して興味も無さそうに、

「ふうん」

と言って、それでも一応座った。

自然と振り払われたウィッティは、文句を言いつつ、まだエンリの後ろに陣取っている。

「……ああ、ごめん、興奮しすぎて自己紹介するの忘れてたんだな、俺。ごめんごめん！ でも俺は基本、オープンよ。知りたいことがあったらなんでも訊いてくれな。スリーサイズだって教えるぜ」

持ち直したタックは明るく言った。

ロンドは呆れつつ、自分も席を一つ引いてきて座る。

きっかけちゃん、というのは、もちろん Rond が言い出した呼び名ではない。

大学一年で互いに知り合って間もない頃は、大した話題も無いから、どうしてこの大学にしたのか、どうしてこの学部にしたのか……当然、そういった話からまずは始めることになる。

Rond の場合、文学部の教育学専攻で入ったので、どうして教育に興味を持ったのか、という話になった。

すると自然、エンリの話もすることになる。元々教えることは好きだったが、教育学を選んだ直接のきっかけは、やはりエンリだったからだ。

別に隠すことでもないから、話の流れで自分が養子であることも言うことになる。どうも珍しいことらしく、気がつけば周囲の人間は皆 Rond の大まかな出自を知っていた。飛び級生だったから、幾分歳若さもあって、目立ちやすかったこともあるだろう。別に構わなかったが、微かな違和感が残った。

大学生活は思いのほか新しいことだらけだった。

自分で言うのも何だが、Rond は自分の要領のよさを自覚していた。多少のことでは動じない度胸もあるつもりだし、ほとんどの人に普通なら嫌われない社交術も身につけている。だから、大学生活もただの学生生活の延長線上にあって、大したことはないだろうと、深く考えるまでもなく高をくくっていた。

Rond が考えなかったのは、ここは州都であり、つまりは都会だということだ。

人の多さも、種類も、それまでいた田舎町——そうと意識したこともなかったが——とは桁違いだった。

表面的なところで言えば、道行く車の数はもちろん、傍目にそうと分かる浮浪者の数だったり、同色どうし固まっている人の多さや、カリカリとせわしなく雑踏を歩く人の多さである。

しかしそれしきでは、ただ、へえ、と冷静に観察して終わりだっただろう。最もこたえたものは、徐々に徐々にやってきた。

如才ない社交術を発揮して、Rond は当然のようにあちこちに友人をつくった。パーティーにも色々呼ばれたし、それを断るような Rond でもなかった。

留学生の友人も数多く、タックと初めて喋ったのも、たしか黄色系中心のパーティーに呼ばれた時だった。それまでは、同じ講義を取っていても、大きなクラスであったし、同じグループに入っていなければ喋る機会も無かったのだ。見覚えがある顔だったので声をかけてみたら、案の定同じ科目をとっていた、という具合だった。

「え、よく俺のこと分かったな、うっれしいなあ」

タックは大きな声でそんなことを、本当に嬉しそうに言ったが、当時のタックは天然パーマを爆発させたような派手な髪型をしていたので、Rond にしてみれば、覚えていて当たり前だった。だいたい、そうでなくても大きな声だし、目立つのだ。

黄色といっても、タックは両親の代の移民ということで、大した訛りもないし、西の州都で育ったそうで、所作もアイラーツアの都会者らしかった。だが両親の言葉も喋れるし、自分の血

筋に誇りも持っているので、先祖の国からの留学生とは親しくしたいのだ、というようなことを、知り合って五分もしないうちに勝手に喋り出してしまうのがタックだった。

「で、 Rond、あんたはどんな歴史を持ってるわけ？」

「いや、おれは、生まれに関しては全然知らないんだ」

「へえ？」

タックは細い目を、興味深そうに見開いた。

「養子なんだよ。産みの親は、顔も名前も分からないらしい」

その頃何度もした説明だったので、少しばかり辟易していたし、次の反応も予測できていた。だいたい、「ごめん」とか、「悪いこと訊いちゃったな」とか、言われる。それが嫌という訳でもなく、ただ、そういうものだと思いながら話した。

しかしタックは、少し考え込んだ後、こう言った。

「ふうん。あのさ、そういうのってどんな感じなわけ？ 根無し草って感じにならねえの？」

考えようによってはとてつもなく失礼な物言いだった。人を選ぶ性格ではある。実際、大学の初めの方によく集まっていたグループでは、タックを連れて行くようになってから、何人かは抜けてしまった。

「別に……そんなこと、考えたことも無いな」

もう少し手馴れてくると、 Rond は

「養母がいい人で、寂しいと思う暇も無かったんだ」

などと言うようになるが、そういう理屈を考えるようになったのはタックに言われたことがきっかけだった。地元では、「ママの子どもたち」というだけで通じてしまったので、出自に悩むことなど無かったのだった。

「まじで？ 俺だったら考えられないな。どういう感じなんだろうな」

しばらくの間、いささか失礼な質問は続いた。だが、 Rond は意外と、嫌ではなかった。その後の付き合いでも、時折うんざりさせられることはあったものの、 Rond はタックが嫌いではなかった。

タックとは、このように意外なところで話が深まったりしたので、エンリのことまで話が及んだのはもっと後になってからだ。

勉強会と称してカフェで集まっていた時、隅の席を陣取っていた二人は

「つかさ、なんでそもそも、俺たち大学に来てるんだろうね」

というタックの呟きをきっかけに語り出した。

「なんでって……なんでだよ」

「だってさ、いい仕事に就くためとか言っても、結局、大学なんて来なくてもいい仕事なんて就けるわけじゃん。ウチの親なんてさ、絶対に商学はやっとけって言ってさ、せめてもの抵抗を試みて文学部も同時にやらせてもらえることになったけど、それって結局一年増えただけで何の得にもなってないんじゃないか？ って思い初めた。今、突然」

二学部をまたぐと、一年増える仕組みになっている。

「はあ。でも、タック、勉強好きだろう」

「嫌いじゃないけどさ。テストとか面倒じゃん。でも正直商学は俺、向いてないよ。経済とかもさ、つまんないもん」

「じゃ、文学部もやれてよかったじゃないか」

「でも文学部じゃ仕事取れないじゃん」

「まあ、そうかもしれないけど」

「あ、でもそっか、ロンドは教育学専攻だっけ、ってことはおまえ、教師になるのか」

「うん、まあね」

「なんでまた、そんなしちめんどくさいものになろうと思ったわけ？」

ロンドは苦笑した。

「本当、失礼なやつだな。おれは意味があると思うからこそ、学びたいと思ったんだよ。教えるのは好きだしさ」

「あー、そういうのクラスに一人はいるよな。優等生タイプ」

「まあ、否定はしないけど」

「でも、なんかこう、もっと直接のきっかけみたいなのは、無かったわけ？ 教えるのが好きだからとか、ありきたりすぎじゃん」

「おまえさあ……。まあ、あるんだけど」

かいつまんでエンリのことを話すと、

「つまり、何、その子を教えてて楽しかったからってことじゃん」

「いや、ちょっと違うかな。エンリはさ……。ママのところに来て、生活して、おれと勉強した二年で、かなり感じが変わったんだよ。って言っても、性格が変わったとかじゃないんだけど。うまく言えないけどさ、文字を覚えるとか、知識を得るとかに限らず……。人一人に教師として関わっていくこととか、そういうことに、生きがいが見出せると思ったというか」

そこまで言葉にしてみても初めて、自分で自分の選択に納得した気がした。

「ふうん？ そのきっかけちゃんっておまえの彼女？」

熱をこめて語っただけに、そのタックの発想にはガックリときた。

「まさか、違うよ。考えたこともない」

「なんでだよ」

いかにも不満げにタックは言い募った。

「つきっきりの二年間、なんて、いかにもラブが芽生えそうじゃんか」

「無いよ。会えば分かると思うけどさ、エンリって本当に無口で無愛想なんだよ。家族愛はもちろんあるし、すごく大事には違いないけどさ、そういう対象って感じじゃないんだよ」

こういう言い方をしたものだから、タックの持っていた印象も、実際、仕方の無いものではあったのだ。

とはいえ、誰とでもこうもしっくりいくものではなかった。

うまくやれなかった訳ではない

ただ、タックが「根無し草」と言ったが、そういった直球の表現を使わずとも同じことを言うことはできるわけで、つまるところ、ロンドは自分が大多数の人間からそのように思われてしま

うのだと、徐々に強く自覚するようになった。

「伝統を忘れちゃいけないのさ」

茶色や黒色の留学生たちは、見た目からロンドにある種の親近感を抱いてくれるようだったが、時折そういうことを言うのだった。

「そりゃ、文明はいい。この国は素晴らしい。だけどだからこそ、伝統を忘れちゃいけないのさ」

そこには優越感が滲み出ている。

逆に、

「親なんかはうるさいけどさ、あたしは全然、気にしないの。伝統とか、慣習とか。好きなように生きるの！」

.....

などと言う者もあったが、どちらも、持っていることを前提に話していることには変わらない。

ロンドはママに育てられたことに誇りを持っている。

けれども、生じ来る焦燥感のようなもの――劣等感なのかもしれない何かは、消すことができなかった。

選択科目は、全て世界史や宗教史関連の科目で埋まった。

過去との繋がりが欲しくなったのだろう。

「エンリ、時間、大丈夫？」

会話が途切れたのを見て訊くと、エンリは表情を変えずに顔を傾げた。

しばしの間があって、

「そうだな、そろそろ出た方がいいかも」

「分かった。じゃ、送ってく」

エンリは肩を竦めた。エンリのこれは、この場合は、<sup>イエス</sup>是、ということだった。

「えー、もう行っちゃうのオー？」

ウィッティがまたエンリの腕に縋り付いた。

「うん」

「じゃーあたしも見送りに行くう」

意外にも、タックが引き止めた。

「やめとけよ、酔っ払い」

「やーね、失礼ね、あたしは確かに酔っ払いだけど、見送りぐらいできるわ」

言いながらも、目はとろんと弛んでいる。

「全っ然、説得力無え！」

「勘弁してよ。おれ、この状態のウィッティ担いでここまで戻ってくるのとか嫌だよ」

「ほら、ロンドもこう言ってるじゃん」

ウィッティはわざとらしく頬をむくれさせた。普段なら、こんな子どもっぽいことはまずしない。

「ウィッティ、また今度うちに来てよ。ママもまた会いたって言ってた」

淡々とだが、あやすようにエンリが言って、渋々納得した。

「分かったわよう。絶対だからね。エンリ、今度はあんたからあたしに連絡すんのよ！」

「うん。分かった」

去り際、皆が手を振ったが、一番手前でタックが、ばちんとロンドに向かってウィンクをした。……どうも、妙な気を回してくれたようだった。

エンリのダンスを初めて見た時の衝撃は忘れられない。本人にしてみれば、ちょっと動いてみただけ、ぐらいの気持ちだったのだろうが、いやだからこそその衝撃だった。

初めはただ呆気にとられ、それから湧き上がってきたのは、強烈な、嫉妬心、だった。そんな自分自身に打ちのめされたロンドだった。

エンリは気づいているのだろうか。踊っている時の、見違えるような生き生きとした表情。意識していたのだろうか。普段は引き結ばれたままの口角がきゅっと上がったこと。

あの時、あの場にいた誰もがエンリのダンスに惹き込まれた。驚愕した。ダンサーとして生計を立てていることは知っていても、かつてサーカスにいたこともあったから、逆に深く考えるこ

とも無かったのだ。あんな顔をして、あんなに優雅に、あたかもその場で生まれ直すかのよう  
に、踊ることなど誰にも想像がつかなかった。

踊りを止めてしまえば、いつも通りの無愛想がいるだけなのだが、あれは印象的すぎた。同じ  
ようにエンリを見ることは、たぶんもう誰にもできなかった。

ウィッティが惚れたのも、そこなのだろう――ウィッティ自身、ダンスをするから、踊りをす  
るエンリこそを、彼女は気に入ったに違いない。そしてまたロンドは、ウィッティがロンドより  
も先にエンリのその側面を知っていたということに対し、複雑な心境にならざるを得ないのだ  
った。

ママがあの時、驚いていたのかどうか、ロンドはよく覚えていない。むしろ満足げに見てい  
たような気がする。ママはサーカスにいたエンリを見たことがあるはずだから、別に意外でも  
なんでもなかったのかもしれない。

ママが、どういうわけかエンリを、どう言うべきなのか、特別扱いしていることは知って  
いた。十三歳という年齢になってから引き取ったのだから、たぶん初めてだろうと、親子ほども  
歳の離れた義姉が言っていた。ロンドが引き取られたのなどは三歳の時で、ロンドにとっては生  
まれた時から育てられたのとほとんど変わらない。

しかしいくら特別だとはいっても、十五になったら家を出なければいけないというあの家のた  
だ一つのルールを、あっさり反故にするほどだとは思わなかった。いや、一度は出た。しかし  
一年後には帰ってきて――それだって、ママからの提案だったというし――二年経った今まで  
、ずっと居続けている。たぶん、これからもずっとそうなるのだろう。

あの家はエンリが受け継ぐのだという感覚を、少なくともロンドは得ていたし、たぶんあの家  
に関わる誰もが今やそういう認識をしている。

ママももう歳だ。この間、八十歳の誕生日会をやった。出版関係者なども呼ばれて、中々賑  
やかなパーティーだった。その時ママは、エンリのことを、マイ・ラスト・ドーター私の最後の娘 というふうで紹介し  
ていて、ひょっとしたらママは、初めからそのつもりで……あの家を遺す相手として、エンリを連れ  
てきたのかもしれない、と初めて思った。

外の風はやはり冷たい。浮つきながら湿っぽい、繁華街の明かりとはどこか対照的で、独特の  
風情がある、東の州都の秋の夜だ。

「今日」

エンリが口を開いた。自分から会話の口火を切るとは、珍しい。

「ん？」

「昔の、サーカスの姉に会った」

「へえ？」

サーカスにいた頃の話は、あまり聞いたことが無い。自分からぺらぺらと話す性分ではなかつ  
たし、ロンドとしても、どこまで踏み込んで訊いてよいものか分からなかった。

しかし、年上の子どもたちが何人かいたというのは知っていた。

「連絡、取ってたんだ？」

エンリは首を振った。

「会社に電話があって、連絡先を伝えていった。何かでおれを見て、所属会社を調べたらしい」

エンリは割と頻繁にダンスの依頼を受けてあちこちに行っていた。時々、ふと点けたテレビの背景で、エンリが踊っていることもある。ロンドも知っている有名な振付師に見込まれたのを皮切りに、次々と依頼が来るようになったのだという。それでも家での暮らしとうまく両立できているらしいのを、ロンドは密かに不思議に思って眺めている。

「連絡したんだ？」

「した」

「どうだった？」

エンリは首を傾げた。これは考える時の癖だった。

「変な感じ」

「ふうん？」

「親は死んだんだって」

「え？」

ロンドは何とすべきか分からずにエンリを見た。ロンドは、エンリがかつての家族であるところのサーカスについてどう思っているのか、いまいち把握できていない。特に大事に思っている様子も見せないながら、特に嫌っている様子でもなかった。お悔やみを言うのも妙だが、言わないのも変で、しばし沈黙した。

「……その、いつ？」

「二年ぐらい前だって」

「そう。……親って言うと、サーカスの団長、だよな？」

「うん。夫婦」

「へえ」

「死んだのは、父親の方。泥酔して乱闘に巻き込まれて、打ち所が悪かったんだって」

「……そう」

「警察沙汰になって、母親の方も酔ってたし、まあ詳しいところはよく分からないんだけど、兄弟たちが皆一度も学校に行ってなくて署名する書類の内容も分からないぐらいだっていうのがバレて、母親も逮捕されて、サーカスは解散、というか、みんな何か更生施設だか教育施設だかに入れられたらしい」

淡々と言う。

ますます、言葉に詰まるロンドだった。

「大変、だったんだね」

「そうみたいだ」

「今は、どうしてるって？」

「何人かは、その施設の職員の世話で、やっぱりまたサーカスに再就職。今日会ったソフィーは、動物の世話をしたいって言ったら、まずは高校に行って大学で動物学を学びなさいって言われて、今年高校に入ったんだって。学費と寮費の支払いは、返済義務のある政府の援助

制度を使ってるんだってさ。自分だけ年上で、特別授業ばかりだけど、結構同級生は優しいんだって言ってた。でも、ソフィーは自分が優しいから周りもそうなるんだと思う」

元々エンリはこのことが話したくて電話をくれたのかもしれないと、遅まきながらロンドは気がつく。こんな饒舌なエンリは見たことがなかった。だとしたら、パブに来るように誘ったのは全くの考えなしだった。

エンリのことだから、どうせ自分の希望などは無いだろうと、どこかで思っていたのかもしれない。そんな自分が苦々しい。しかし一方で、エンリのうちに積極的な欲求が生まれることなど万に一つあるかないかだという思いもあって、しょうがないじゃないか、と自分を慰めてもいる。

「仲、良かったんだ？ その、ソフィーとは」

エンリはまた首を傾げる。

「うん。ソフィーは、二番目の姉。年齢はたぶん、ウィッティよりは上だと思うけど、よく分からない。一番優しかった」

それからまた考え込むようにして、

「小さかった時は、たまに出るデザートをおれが速く食べ終わっちゃうと、こっそり自分の分を分けてくれた」

そういう話を聞くのは不思議な気がしたが、語るエンリにしても同じらしく、どこか居心地が悪そうに首をひねっている。

「なんか、サーカスのこと、すごい久しぶりに思い出した」

先ほどから、両親や兄弟たちと言って話をしているが、実際には血は繋がっていなかったはずだし、とても親子と呼べるような関係性でもなかったというふうに聞いている。エンリにしても、塾に兄弟で来ている子どもたちを見て、たしかその二人は大して互いに似ているわけではなかったと思うのだが、

「兄弟って、本当はあんなに似てるものなんだな。知らなかった」

と書いていたことがあった。

どうも孤児を引き取ってきては、公的援助金をを受け取りながらサーカスの芸を仕込んでいたようだとママは言っていたが、今のエンリの口ぶりからすると、ロンドが想像していたよりはずっと、それなりに家族らしい繋がりがあったようだ。

「ソフィーは、幸せそうだった？」

「うん」

それから首を傾げた。

「たぶん、そう。幸せだと思う」

「そっか。そのうち会ってみたいな」

「家の方の連絡先、教えたから。うちにも来てみたいって言ってた」

「その時は呼んでよ」

エンリは頷く。

その姿を見て、なぜだかロンドは、エンリの成長を実感した。

何故だろう……たぶん、エンリが、あまりにあっさりとしているようには見えるが、過去と向

き合ったのだと分かったからだ。既に、エンリがそれなりの、社交性、と呼んでも差し支えないものを発揮しているのを見ていた。エンリだっていつまでも、 Rond と マー マ としかうまく付き合えなかった、不器用で未熟な子どものままではありえないのだ。

それに比べて、自分はどうかろう、と Rond は思う。

昔から、我ながらそつがなかった。大して苦労した記憶というものがない。勉強も運動も問題なく、むしろ人よりもうまくこなせたし、人間関係にすら大変な思いをしたことがない。飛び級して年上の間に混じっても、特にいじめられることも無ければ、一人だけ幼い気がして焦るというようなことも無かったし、逆に一人大人びた気になって調子付くこともなかった。

しかしその分、過去たとえば十年ぐらいの間、大して変化していない気がする。 Rond だってそれなりに失敗してきているが、それにしたって、そこまで劇的なものは無かった。せっかくの十代を無駄にしてきてしまったような気分、この頃は時々あった。自分より年上の連中を見ている、どれほど馬鹿らしく考えなしだったとしても、自分よりかは若さを満喫しているように思えた。

タックやウィッティなどはその最たる例だった。二人とも、味方も多いが敵も多い。良くも悪くも目立つからだ。だけど、だからどうした、というぐらいのエネルギーと確固としたものを持っている。前までは、彼らには彼らのよさが、自分には自分のよさがある、と臆面も無く本気で思えたが、この頃はとみに、ただただ眩しい。あれほどの情熱も行動力も、自分には無い。

エンリにだって、特別な技能がある。

Rond には、実際のところ、要領の良さしか無いのだ。情熱も個性も無く、誇れるような技術も持たず、伝統も……今では、帰れる家も、あるような、無いような、そんな状態だ。子どもの相手をするのは好きだが、究極のところ、誰にでもできることで、別に Rond でなくてもよいし、もし教育者になるという選択肢を取り上げられたとして、たとえばタックが自分のアイデンティティを取り上げられそうになった場合のように、抵抗する意欲を持たないだろう——それならそれで、別の道を探してしまう。 Rond はそういう人間で、そういう自分のことをよく分かっている。

それは長所のはずだった。臨機応変さであり、冷静さと呼べるものだ。なのに今は、素直に自分のそうした特性をありがたがるができない。

ずっと、人が好きだと思ってきたが、それすら今は自信が無い。

Rond は大学に入ってから二人の女の子と付き合った。一人は入学してすぐの頃で、三ヶ月続いた。その次の年に付き合った子とは、半年続いた。

二回とも、初めにそういう働きかけをしてきたのは向こうの方で、別にだからといって何も考えずに来るもの拒まずで付き合った訳ではけして無かったが、振られたのは二回とも Rond の方だった。直前までうまくいっているような気持ちでいたのに、ある時突然終わりを告げられたのだった、二回とも。

終わり方も似ていた。

「なんでか、訊いてもいい？」

そうだ、同じことを言ったのは Rond だった。

二人とも同じようなことを答えた。曰く、特別に愛されている実感が無い。 Rond が優しいのは誰にもで、自分にだけ優しいわけではない。 Rond のことは一人の人間としては好きだけど、

パートナーとしてはもう考えられない……。

どちらの時も、ロンドは傷ついた。傷ついたが、同時に、冷静に問いかける自分もいるのだった。本当に、本当に、そこまで好きだった？ そして、ロンドは否と答えることができない。実際、今になって振り返ってみると、二人きりの時間よりもタックや気の合う友人たちとの時間を優先していたところもあって、振られても仕方なかったかな、と思う。

もう半年ほど前になるが、タックが派手に彼女と別れた。喧嘩ばかりしている二人ではあったが、ついに訪れた終わり——周囲からすれば、当然見えていた結果だった——による意気消沈ぶりは、それはかなり傍迷惑なものだった。

うるさい男は、落ち込み方も違う意味でうるさかった。素面でもあからさまにどんよりとしていて、暇さえあれば彼女との思い出を垂れ流すのに、酒が入るといっそう止まらず、誰彼構わず泣きつくような有様だった。

「あんた、ねえ！」

タックを引き剥がしながらウィットィが言った台詞は、今もからかいの種として語り継がれている。

「別れる時ってのは、相手がどんなに追い縋ろうが厳しく突き放す時なのよ！ 次からは自分で振ってみなさい！ 運命の相手は自分の力で掴み取るものなのよ！ もうダメだって分かてるからあんたも追い縋らないんでしょ、それなのにグダグダグダグダと管巻いてるんじゃないわ！」

多少動転していたのか混乱が見えるが、ウィットィならではの言葉だった。

タックの醜態には心底呆れかえりながらも、そこまでの熱量を以って人を好きになるとは、どんな感じなのだろうとロンドは思った。そこまでに重要な誰かがいるというのは、あるいはそういう存在をつくるというのは、どんなものだろう。タックを羨ましくさえ思った。

ウィットィと言えば、この頃ますます言葉に遠慮が無くなってきて、ロンドは散々なことを言われている。曰く、

「かっこつけてるんじゃないわよ」

「苛々するのよー」

特に酒が入っている時には、こんな言葉と共に絡まれる。

理不尽だと思いつつ、どこか無視できない鋭さもあって、ロンドを時折鬱屈とさせた。

何となく、エンリのふわふわの頭を撫でた。

「何」

「いや、なんとなく……エンリは偉いなあ、と、思っ」

睨まれた。いや、意味が分からないから説明しろ、と言われているのだろう。

「サーカスのことをちゃんと聞いたのって、初めてだよ」

「そう？」

「そうだと思うよ」

また首を傾げる。

「そうかも」

少し待ってみると、エンリは続けた。

「前は、あんまり思い出せなかったし、別に、敢えて思い出したりもしなかったから」

「今は、思い出せる？」

「……前よりは。でも、別に、そんなに思い出すわけじゃない」

「そっか」

「なんで？」

「ん？」

「別に、思い出すことなんて偉くもなんともないだろ」

「ああ、まあ、そうなんだけど」

どう言えばよいものか、ロンドは迷う。

「まあ、さ。エンリは、変わってるってことじゃん。変化するっていうのは、いいことなんだと思うよ。だから、偉い」

エンリは眉をひそめた。分からない、ということだ。

「だから、さ……たとえば、さっきも、なんだかんだ、タックとだって、ちゃんと話せてたし。ウィッティにも、すごく好かれてるしさ」

最後のは余計だった。フォローするためにもう少し続ける。

「ああ、つまり、なんというか……成長してるってことなんだけど。昔は、人と話すのなんか、初めから拒否してるようなところ、あったじゃん。おれなんか、エンリと初めて会った時から、大して変わってないのにな」

エンリはじっと見返してきた。

「……変わらないのは、良いことじゃないの？」

「……良くも、悪くも、なんだとは思うけど」

なんだか気まずい。こんな気まずさは生まれてからこれまで、そう何度も味わっていない。

「ロンドがあんまり変わったら、おれはビビる」

「いや、そりゃ、そうだけど」

ロンドだって、エンリが突然きらきら笑いながら高い声で抑揚をつけて話し始めたらちょっと立ち直れない。

「いや、そうなんだけど……なんだろうな、変化するっていうか、成長するってことは、魅力的なことなんだよ。いつまでも変わんない奴なんか、誰だってつまらないじゃん。おれなんかさ」

ぽろりと吐露してしまい、しまった、と思った。

これが本音だったのだと自分自身に驚きながら、ひどい自己嫌悪に陥った。これではただの愚痴だ。他人の愚痴を聞く分には全くやぶさかではないし、喜んで聞き役に徹するロンドだったが、自分自身の甘えを許す性分では無かった。愚痴を漏らすなど、自分の行いとしては最も軽蔑すべきものだった。

エンリが、何かぽっかりと中身が抜き取られてしまったかのような不思議な顔をした。

後から思えば、これは驚いていたのだ。

それからエンリは首を傾げて、立ち止まった。

気まずさの止まないロンドは、ごまかすように早口で言う。

「なんて、な。ていうか、ごめん。なんでもないよ、っていうか、忘れて。ちょっと口が滑った。本気で言ったわけじゃないよ」

はっきり言って、人生最大の失態だ。これほど慌てたことは無い。普通の間違いなら、ごまかし方など二十も三十も出てくるのに、今はさっぱり、何も浮かんで来ない。

エンリが、いささか突飛な澄んだ響きで、

「ばーか」

と言った。

ロンドは驚いて、言葉を失い立ち竦んだ。

エンリは呆れ果てたような、どこか挑戦的で怒っているような、なんとも言えない目をして見つめていた。

「おれの最優先は、いつだってロンドだよ。おまえだろ。忘れるなよ」

……その言葉が染み込んでくるまでにはいくらか時間がかかり、その間に、エンリはいくらか遠慮がちに、その腕をロンドに回した。ぎゅっと食い込んだその強さは、慰めているようでもあれば、叱咤しているようでもあった。

「他の奴らのことは知らないけどな、おまえはそんなことで悩むなよ」

その意味を理解し、エンリの意外なほどの暖かさに縋りたくなって、抱き返そうとしたまさにその時、エンリはさっとロンドから離れた。

二人の間に吹いた風が、殊更に冷たかった。

エンリは強い目で、今度は明らかに怒った様子で見上げてくると、ぷいと顔を逸らして、歩き出した。

慌てて追う。

「エンリ」

振り返る。

「正気に戻った？」

「……ああ。うん。ありがとう」

「そうか」

また向こうを向いて、先に歩いていってしまう。

ロンドの方が足は長いから、すぐに追いつけるのだったが、あえて少し遅れて歩いた。

エンリも照れているのだと分かったからだ。

結局、それからエンリの泊まっているホテルが見えるまでの五分弱、何も話さなかった。

エンリが振り返って、いつもの無表情で、もういいよ、と目で言った。

「今回の仕事は、あとどれぐらいあるんだっけ」

「明後日まで」

「そっか。がんばれよ」

「うん」

「帰ったら、みんなに……ママによろしく」

頷いて、去っていった。通りの雑多な色の明かりに浮かび上がるほっそりと小さな影は、その後いつまでもロンドの脳裏に残った。

今までで一番、名残惜しく、だけど同時にほっと胸を撫で下ろした、印象的な別れになった。

## 四 旅立ち

時々、ふとしたことで過去が紛れ込んでくる。

きっかけはいつも些細なことで、たとえば今ならば、生徒の一人がなにげなく口ずさんだ、童謡の一節だった。

あの、暗く埃っぽい中をぴかぴかと安っぽく光る電球に、今も照らされているような気がした。

父母が買出しに出かけたまま戻らず、子どもたちがお腹を空かせるのはよくあることだった。翌朝になってべろべろに酔って帰って来るか、どんな乱闘をしてきたのかぼろぼろに叩きのめされてふらふらで戻ってくることもある。どちらにしろ、すぐには食べられないことはもうとっくに分かっていた。

エンリが知る限り、兄弟姉妹たちがお金を持たされることは無かった。買い物の仕方など誰も知らない。移動する時に街中は通るから、トラックの中から見るとはあったが、実際に町に行ったことは無かった。誰も、たとえばお腹が空いた時にお金があれば店で食べ物が買えるとか、そういった知識もろくに持っていなかったと思う。そうでなければ、子どもが八人もいて、お腹を空かせながらただひたすら、一晩中親の帰りを待っているなんて、おかしい事態の説明がつかない。

その時、たぶんエンリは、まだほんの小さかった。

皆でカードゲームをしていた。だけど自分が手札を持っていたというよりは、誰かに寄り添ってゲームの様子を眺めていたとか、そういう感じだった気がする。半ば寝そうになりながら、誰かに寄りかかっていた感触があった。

誰か一人が、カードを放り投げた。

空中にカードが舞って、落ちていく。

また別の誰かが、おい、と声を上げた。これは一番上の兄だろう。

元々、腹が減っているので皆、気が立っている。

「もうやだよ、やってらんねー」

初めにカードを捨てたのは、三番目の兄だったのだろう。こういうことを言うのは、いつも三番目の兄だった。すごく嫌な感じに、嫌なタイミングで、皆の言いたいことを代弁してくれるのだった。

それでいつも、咎める長兄と口論になった。

「何、勝手やってんだよ。せめてゲームが終わるまで待てないのか」

「やだよ、もー、おれ、腹減った！ 腹減って死にそう！ カードなんかやってられないよ！」

仮に、負け惜しみで言ったのだとしても、誰もがそう思っていたことは確かだ。

この時は長兄も黙った。

また一人、誰かがカードを捨てた。

長兄を窺いつつも、皆次々にカードを置いた。

長兄も、諦めたようにカードを床に伏せた、

誰にも、ゲームを続ける気など残っていなかった。

たぶん、あの日は、蒸し暑かった。そういう感じの電気の色だった。虫の羽音のような音が響いていた。周りには、道具箱が積まれていた。トラックの中で寝るよりは、テントの中で寝る方が好きだった。まだ広い空間があって、暇だったりお腹を空かせていても、こうしてカードで遊んで気を紛らわすこともできる。

やるせない沈黙が続いて、エンリは急に泣き出した、どういうわけか涙が出た。エンリはまだ小さかった。

誰か力なく歌い出した。女の子の声だったから、たぶん一番上の姉だろう。あの童謡だった。

ぽつぽつと歌声が重なっていく。

深夜まで大合唱となった。

誰もが、泣くか、涙ぐむかしていた。

二人が戻らないことなどざらだったのに、どういうわけかこの時は特別だった。どういうわけか皆センチメンタルになり、兄妹一丸となって歌った。

この頃とみに、昔のことが思い出される。

昔といっても、サーカスの頃の話なので、せいぜいが十年前だ。

しかしそんな最近の話であっても、ついこの間まで、霧がかかったようにまるで思い出せなかった。座長夫妻や兄弟たちの顔など、今でもろくに思い出せない。前にソフィーが来た時にいくつか兄弟たちの写真を持ってきてくれて、懐かしい面影があると思ったものだったが、それが即、記憶を鮮明にするという訳にはいかないようだった。

しかし不思議なのは、一度思い出したことは、意外と忘れない……そして、記憶が戻ってきたその瞬間は、夢から半分だけ覚めたような、ひどく不安定な心地になった。

一つ一つは、本当に小さな、断片的な場面ばかりだ。

二番目の兄が、ソフィーの嫌いなものをこっそりと食べてあげて、それを見咎めた長兄と喧嘩になって二人がしばらく口を利かなかったこと。これは、そのソフィーの嫌いだったペーストの匂いに、ある朝突然記憶を呼び覚まされたのだった……これまでも、何百回となく嗅いでいたはずなのに。

それから、立て続けに曲芸の受け渡しミスがあって、一日食事を抜かれたこと。これは、州都に仕事で行った時のファーストフードの揚げ物の匂いに、急に思い出した。親が食べていたのをお腹を鳴らしながら嗅いでいた。

有名人が来てチップをくれたとかで、服やループが新調された。新しい服の匂いと春の日差し。

公演で行った先のむんとする夏の花の匂い。日差しの強い暑い午後だった。近くに海があった。潮の匂いまで蘇ってくる。

どしゃぶりの雨でテントが潰れて、大泣きするか笑うかしかできず、開き直ってずぶ濡れになってはしゃいだこと。雨、雨、雨の匂いと洪水のような音。狂ったような興奮と哄笑が渦巻いた。

ずっと失っていた記憶だった。

取り戻したからといってどうということもないはずなのに、ひどく動揺する。

帰りたいとは絶対に思わない。思い出せば思い出すほど、今とは比べようもない劣悪な環境だったことが分かる。しかし失われた輝きであることも確かで、けして戻れない時間であり、兄弟たちとの絆は、暖かいものとも言いがたかったが、代えがたい強さと熱さがあった。

エンリは二十二歳になっている。

別にどうということもない。ただ、その歳になっただけだ。

だが周囲は変化し続ける。この間、ばあさまたちの一人アリーシャはついに寝たきりになった。ママはまだまだ元気に見えるが、それでも少し、喋り方や動きは以前よりもゆっくりになっている。ロンドは大学院で、修士（というものが何だか、エンリはよく分かっていないが）を今度終える。

それから、虹蛇の卵が変化の兆しを伝えてきた。

卵の、なんだろう、胎動のようなものが、エンリには手に取るように聞こえた。五年もの間エンリの内に居座り続けた卵は、ついに孵化の時を迎えようとしていた。

これほどの時間を要したのは、それはもうただ虹蛇であるがゆえ、ということなのかもしれないし、エンリの中にあつたという特殊な要素ゆえだったのかもしれない。それか、ドラゴンとのハーフであるがゆえか。

エンリには、卵の感じていることをなんとなく察することはできたが、話をすることはできないので、気になることはあってもまさか訊ねることなどできない。第一、卵の段階でそういったことを把握しているとも思えなかった。

しかし案外、五年もかかるという事情こそが、あの美しい大蛇がエンリなどに卵を託した理由なのかもしれない。いくら聖地と呼ばれる場所に産みつけだとしても、今の世の中ではとても安全が保証されたものではない。

とはいえ、可能性としてはまだ、エンリが孵った蛇に餌として喰われるということもありうる。あまり心配はしていなかったが、時折そういう想像もして途方にくれた。

この五年というもの、エンリは月経を迎えていなかった。

身体自体は、そういう月ごとの変化を続けている。ただ、身体の外に出てくる前に卵が食べて、全て嘗め尽くして飲み下してしまうのだ。実体が無いかに見える、しかも卵に、どうしてそんな芸当が可能なのかは今だに不思議なのだが、とにかくそういうものらしい。

エンリの身体が卵子を迎えると虹蛇の卵は喜ぶ。妹か弟でもできた気分になるのだろうか。つられてエンリも嬉しくなる。かといって、まさか実際に成長させる訳にもいかない。

女の子というのは、子どもをほしがるものらしかった。この頃はエンリも、ボランティアで来たり、単に里帰りも兼ねて訪れる同年代の女の子たちの話を聞く機会も多いのだったが、割と、

「旦那はいなくても子どもはほしい」

と言う子が多い。

エンリにはあまり実感が湧かない。子どもがいる女の方は、いない女の人と少し感じが違うというのは分かる。子どもはかわいいと思うし、ただ、だからといって自分が産みたいと思うかというと、よく分からない。絶対に嫌という程でもないが、卵のためだけに産もうと思うほど主体性が無いというか、考えなしな訳でもない。

現実問題として……稼いでくれる相手や庇護者もないのに、子どもを産むのは無謀だろう。今やこの家と塾の稼ぎ頭となっているエンリには無理な相談だった。

卵は、初めはエンリの卵の誕生に喜んで、うきうきとする。しかしやがて、その卵が死にゆくしかない運命だと悟ると、焦って、嘆き出す。エンリの神経がいつか焼ききれてしまうのではないかと、まじめに心配になるほどの悲痛さで、直に訴えてくる。その果てに、嘆きながら、死にゆく卵を喰らう。

こう、毎回、何十回も繰り返されているのに毎回大げさなほどに一喜一憂を繰り返すのでは、あまりにも学習能力が無いのではないかと疑ってしまう。卵にそんなものを求める方が間違っているのだろうか。

そう遠くないうちに孵化するだろう卵にとって、この共食いにも似た行為はどんな影響を与えているのだろうか。

もう二十年もこの近くに住んで塾で働いている、数少ない雇われ教師のカレンは元はママの養子で、つまりエンリの義姉である。

カレンには絵本作家の夫がいて、このぎょろ目のティムは話も書くがむしろ絵の方が専門なので、今までに何冊か、ママの考えた話に絵を描いて出版もしている。この話をウィッティにしたら、やはりまた

「だから、なんでそういうことはもっと早く言わないのよー！ あたしその絵本も、本当、大好きなのに！」

と怒っていたが。

カレンがいてくれるおかげで、エンリは心置きなく出張に行けた。塾にしても、ママの体調にしても、最近ママ一人に任せておくにはいくら不安があった。口に出して言ってしまうとママもたぶん面白くはないから、あまり大っぴらにできる話ではないが。

カレンはカレンで、エンリがいて良かったと言ってくれる。でも、もしもエンリがいなかったら、カレンたちは夫婦でここに移り住んでしまうぐらいのことはしただろう。二人はエンリのようにしょっちゅういなくなったりしないし、むしろその方が良かったのではないかという気もする。エンリがここにいるのは、あくまで、ママとエンリ、双方のわがままの結果だというふうにエンリは思っている。

「しかし、エンリも、本当に……」

カレンはしみじみと言う。もう何度も言われているので、半ば聞き流している。

「女らしくなったよねえ」

まあ、そうだとは思う。時々、仕事先で妙な視線を感じると、多少大げさに男らしい喋り方や振る舞いをするようにしている。そうすると大抵、相手は怯むからだ。

塾では逆に、時々笑みを見せるようにしているので、人当たりが柔らかくなったように見えているらしい。たとえば相手を安心させるために、きゅっと口角を上げる。それだけでだいぶ違うのだと今は分かる。

しかし、エンリの中では、大して何も変わっていない。ただ、歳を取っているだけのように思う。

エンリは、まだ、まだ、まだ、若い。充分に分かっている。それでも、たとえば五年前に比べたら、やっぱり老けているには違いないのだ。

昔のことを感傷的に思い出せるようになってきたり、作り笑いを覚えたり。そして、一人で庭に立ち風を感じていると、特別な理由もなしに涙がせり上がってきたり。これが歳を取ることではなければ、何だというのだろうか。

あるいは、卵もこの時間を惜しんでいるのかもしれない……もうすぐ来る別れを、寂しんでいるのかも。それがエンリに伝染しているのかもしれない。

「そういえば、ロンド、また戻ってくるんでしょう？」

カレンの言葉に頷く。

「あの子ども、大学院を卒業するんだよねえ。速いなあ。論文は終わったって？」

「たしか、今日……明日？ が、締め切りだって。来週には帰って来るつもりだって」

「その後はどうするって？ 博士課程に進むのかな？」

「さあ。聞いてない」

「あの子なら、博士でも問題なく奨学金取れるでしょうね」

「そうなの？」

「そうだと思うよお。アッタマいいもん、あの子。まあでも、論文の出来に左右されるのかな」

「ふうん」

「でも、 Rondって小学校とかの先生になりたいんじゃないっけ」

「さあ。たぶん」

「先生になりたいんなら、博士まで行くことはないのかな」

エンリは肩を竦める。

「さあ……」

「なんかでも、この前は確か西大陸に行ってなかったっけ？」

頷く。

「結局何がしたいんだろうね？ 今のあの子は。修士やることにしたのだって、割とギリギリで決めてたし」

エンリも、大して聞いてはいないので答えようが無い。

「ああ、でもいいなあ、若人。おばさんにはその無限の可能性が羨ましいよ」

カレンは頬杖をつきながら、大げさに溜め息を吐いてみせた。

こうやっておばさんぶるのは、カレンのお気に入りのポーズだった。しかし全く実感が籠もっていないわけでは無いだろうから、反論も同意もせず、ただ肩を竦めてみせるのがお決まりの、エンリの受け流し方である。

Rondが帰って来ると皆喜ぶので、毎度、パーティーのような様相を呈する。年少組は遊んでほしがると、年長組や大人たちはRondの話を知りたがる。あるいは、自分の話を聞いてほしがると。

どこからかお茶やジュースにお菓子が持ち寄られ、集まった皆の間を、Rondはそれが当たり前というふうに従順に巡る。

誰もが嬉しそうに楽しそうな時間は、エンリのお気に入りの一つだ。Rondを中心とした談笑を、温室の片隅で眺めているのが好きだ。

「みんなには、まだしばらく言わずにおこうと思うんだけど……」

帰ってきた日、ママと三人で夕食をとりながらRondは告げた。

「一年間、ボランティア・プログラムで諸島に行くことにした」

諸島、というのは、アイラーツアのすぐ北に星雲状に広がる島々のことで、先住民を主な島民とする。

「おや、まあ」

　　ママは穏やかに片眉上げた。

「どんなことをするの？」

「小学校の補助教員」

「おまえにぴったり聞こえるね？」

「おれもそう思うんだ」

「エンリはどう思う？」

　　ママの問いに、エンリは首を傾げる。どう、と言われても。

「ママ、エンリが困ってるよ」

「知ってるわ」

「あ、そうなの？」

　　困っている。特に何も言葉が浮かんでこない。感想を持つことは、エンリが最も苦手とするところである。

「……さあ」

　　やっと搾り出して、その一音だった。

　　ママが笑った。

「もう少し、何か言ってごらん下さい。よいと思うとか、似合わないとか、でいいから」

「……いいと思う」

　　にっこりと、ママ。

「上出来だわ」

　　エンリは身じろぎした。

　　翌朝、週末で子どもたちも来ないので土いじりをしていると、ロンドが寝ぼけ眼で、髪もぼさぼさなまま家から出てきた。

「おはよう」

「おはよう。まだ寝てたら？」

　　疲れているだろうに。大仕事を終えて家を引き払い、長旅の末に帰ってきた翌日なのである。

「いいよ、なんか目が覚めちゃったし……」

　　言いながらも、欠伸をする。

「それに、そうは言っても十時間は寝たからね。あんまり寝すぎるのも良くないでしょ」

　　エンリは作業に戻る。

「家庭菜園、始めたんだ？」

　　手近な雑草を引っこ抜きながら、頷く。

「カレンが、昔はやってたって言ってて……ママに聞いたら、台風で駄目になっちゃった年があって、それから再開しなかったんだって、言ってて」

　　それで、とりあえず土を耕していくつか野菜の種を植えてみた。今は青々とよく育ってくれている。トマトなどはもういくつか採って食べているが、まだしばらくは楽しめそうだ。

「そのの……テープが巻いてあるやつは、小さい奴らの」

「へえ？」

「毎日来る奴らは、気になったらしくて、うるさかったから。どうせなら、自分で種を蒔かせて、面倒も見させてみようと思って」

「いいなあ、それ」

ロンドは菜園脇の芝生に座りながら言った。

「参考になるな。それぞれに植物の世話を任せることで、自主性や責任感を育てることに繋がりそうだ」

エンリは眉を寄せた。そういう言い方は好きではない。とてもうさんくさく響くとエンリは思うのだが、ロンドは長い論文を一つ書き上げたぐらいだし、そうした言い方の方がじっくり来るのかもしれない。

ただ一応、釘は刺しておく。

「世話しない奴らは、しないよ」

「あ、そう？ まあ、そんなものか」

「芽が出たり、花とか、咲くと、喜ぶけど。その時だけだな」

「世話してる奴らは？」

「自分の子どもみたいにかわいがってる」

「そっか……」

黙りこむ。

まだ眠いのだろうか。しかし、昨日から感じていたのだが、論文執筆という大仕事を終えたからなのか、それとも六年続いた州都での生活を引き上げた感傷ゆえか、知らないが、ロンドは妙な清々しさを身に纏いながらも、どこかぼうっとしている気がする。

「今、さあ」

しばしして再び口を開いたロンドに、エンリは作業を中断して振り返った。

「西大陸でお世話になった学校の子どもたちに、この種を届けて、育てさせてやりたいなって思ったんだけど」

ロンドは少し言いよどんで、

「考えてみれば、あっちじゃ水は貴重で、家畜にやるのにも事欠くことだってあるんだよな。大体、植物ってのは向こうじゃ勝手に生えてきて育つもので、自分で偉そうに育ててやるって言って育てるものじゃないんだよな。つまり……おれがこんなことを思うのも、好意からにしたって、単なるお節介なんだよなあ」

溜め息を吐かんばかりのロンドをじっと見やると、微笑みを向けられた。

「おれ、西大陸でのことってエンリに話したっけ」

首を振る。

「聞きたい？」

頷く。

「そっか……一昨年の夏に行ってたってのは、知ってるよね」

「うん。でも、待って。これ、先に終わらせたい」

これ、というのは雑草取りのことだ。まだ日の上がりきっていない午前中に終わらせておかないと、炎天下の中やることになる。

「あいつら……小さい奴らは手伝わないの？」

「ある程度は。でも面倒なことは基本、嫌がるし」

「しっかりやらせればいいのに」

「無理やりやらせても仕方ないよ。そのうち自分でやるようになってたら嫌でも分かるだろ」

「エンリって、そういうところ、妙に達観してるっていうか、寛大だよな。……おれも手伝うよ」

エンリは無言で感謝した。

それでも、それなりに面積があるので、たぶん二、三十分はかかった。

汗もかいたし、土まみれにもなっていたので、一度家に入って身体を洗ってもよかったのだが、なんとなくそういう話にはならず、木陰に座ることにした。草が少し乾燥してゴワゴワしている。

「で、なんだっけ」

「西大陸」

「そうそう。……その時も、ボランティアスタッフってことで行ったんだ。二ヶ月だけだったんだけど」

そうだったのか。

「内陸の、小さな町だったんだけど……内乱が終わって、何年も経ってるんだけど、孤児は多

いし、教師も少ないっていう場所です。その中で、国際義援団体が建てた教育施設があって、そこにいたんだ」

「内乱？」

「おれが行った時には、一応終わってから、たぶん四年、かな？ 経ってたけどね」

「危なくはなかった？」

「まあ、治安はまだ悪かったし、全く安全だったとは言えないけど、大丈夫だったよ」

「よく行ったな」

「んー、まあ」

ロンドは頭を掻いた。

「ちょっとその時、おれ、切羽詰っててさ。精神的に。とにかく、外に出なきゃって思って、危険にしても、気にしてたらどこにも行けないよなってことで、敢えて気にしなかったんだよ。

でも、行ってよかった。正しい判断をしたと思うよ」

「……ふうん」

「ああ、その、切羽詰ってたっていうのがさ、……まあ、おれ、教育者になりたいっていうことで大学に行ったんだけど」

「ん」

「大学の近くの小学校に、やっぱりボランティアで時々顔を出させてもらってて」

それは聞いたことがあった。

「でも、なんだろうな……違うなあ、とって、さ。おれが求めてた教育って、ああいうのじゃないし……なんだろうな、制度とか組織の中でやっていくっていうのは、おれがここで育って、実感として興味を持った教育とは、どうも違うものだって思うようになってさ。でも一方で、ちゃんとそういう意識を持った教師がいないと、学校とかも、いつまでも変わらない訳で、ある意味でそういう所に行く子どもたちを切り捨てることにもなるだろ？ うまく言えてるか分からないんだけど」

分かった？ と訊くので、

「思ったのと違ってたってことだろ」

と答えると、ロンドはいくらか肩を落とした。

「まあ確かに、突き詰めると、要はそういうことなんだけどさ」

期待に沿える応えではなかったらしい。

「まあ、それで……実際に働くよりも、もっと教育そのものについて考えたくて、大学院に進むのを決めたのはいいんだけどさ。やっぱり、悶々としてて。そういう時に、その、西大陸ボランティアの広告を見つけたんだよ。航空費は向こう持ちって言うし、給料が出ないだけで、ほとんど無料滞在に近かったからね……飛びついた」

それからロンドは、ちょっとだけ苦笑いした。

「実際に行ってみると、結構大変だったんだけどね。環境もそうなんだけどさ、それ以上に、子どもたちとは言葉が通じないっていうのがさ、当たり前のことなんだけど、ちゃんと分かってなかったんだらうな。こたえたよ。ちょっとはおれも向こうの言葉を勉強したけど、二ヶ月じゃ

大して身に付かないし。おれ、見た目では相当親近感あったから、なんか情けなくてさ」

言葉が通じなかったのなら、ではロンドは勉強を教えていたわけではないのだろうか……しかし疑問を差し挟むより早く、ロンドは話を続けた。

「でもさ、別に、勉強教えるとかじゃなくても、子どもたちにしてやれることがあるっていうのも、分かったんだ。基本的にはおれ、事務スタッフだったんだけど、それでも終始生徒たちについて考えてたし、一緒に遊んだり、ふれあう機会も結構あったしさ。大事なものを見失わなければ、こだわることも、何かに特別しがみつ়くことも、無いなって思ったんだよね」

なるほど。

「それに、あの土地は本当にひどい状態かもしれないけど……あいつら、元気なんだよ。すごい、いい顔して笑うんだよね。その時は、カメラなんか盗まれるかもしれないっていうのもあって持って行ってなかったんだけど、悔しくてさ。次行く時は、絶対にあの顔を写真に収めて、エンリにも見せてやりたいよ」

見てみたい、とエンリも思った。ロンドがこれほど眩しように語る記憶とはどんなものなのだろうか。目にした世界を、他人と直接共有することができたらしいのに。

ロンドはそれまでの熱弁を恥じるように、声のトーンをいくらか落とした。

「……ま、さ。それで、帰ってきてから修士の勉強してたんだけど。取る授業とか、書いたレポートの内容とか、西大陸に行ってなかったら全然、違うものになってたと思うんだよね……論文も、西大陸での教育支援について書いたし。初めの計画書では、全然違うものを書くつもりだったんだけど」

どんなものだったのかと目で訊く。

「アイラーツアの公教育の問題点。まあ、それはそれで、やっぱり興味深いテーマだとは思っただけどさ。もっと、ただの愚痴っぽいものになっちゃってたかもしれないな」

なんとなく、沈黙が下りた。

時折、思い出したように葉擦れの音がした。

「……おめでとう」

「え？」

驚いたように見返してくるロンドから目を逸らす。なんとなく、照れくさかった。

ロンドが、何やら悩んでいるというか情けない感じになっているのは、なんとなく察していた。しかしエンリは、ウィッティなどと違ってそれに苛立ったり、あるいは何かをしてやろうと思うことも無かった。ただ、ロンドならば勝手に、ひとりでに暗いトンネルを抜けてしまうだろうと思って、ただ見ていた。そしてその通りになった。

今、エンリに分かるのは、ロンドがかなりはっきりと、己の進むべき方向性を見出して、見据えているということ……一つの新たな旅立ちを迎えているということだった。

だから今のは、新たな門出と、そこまで辿り着いたことへの祝福だった。

しかしそれをうまく説明できる気はしなかったし、もう一度言うのも何か気恥ずかしかったので、エンリはただ視線を逸らした。

ロンドがどこまでその意味を汲んでくれたかは分からないが、それでも静かに

「ありがとう」

と言ってくれた。それで充分だった。

「そういえばさ」

ロンドは照れくささを隠すように、明るい声を上げた。

「タック、覚えてる？ 何回か会ったことあると思うんだけど」

エンリは首を傾げる。

「黄色の、うるさい奴」

「そうそう、それ。あいつさ、博士課程に進むって。今は研究者になるつもりみたいだよ。笑っちゃうよね、あんなに、勉強なんかくだらない、みたいなこと、言いまくってたのに」

「それ、確かにすごい言われた」

「え、あいつエンリにまで言ってたの？」

「なんか、おれが学校行ってないっていうので、そういう話になった」

「うわ、なんか、ごめん」

昔も、この場所で、こんな風に座って話したことがあった……何度もあった。初めは、歴史や地理について教えてくれて、そのうちにこうしてただの会話に流れた。そういえば、そうだった

。

せり上がってくる懐かしさに、笑いたいような、泣きたいような気持ちになった。

ロンドも、ついに旅立つ——大学を出てしまえば、こんな風に頻繁に帰って来るとももう無いだろう。今はこれほど確かな存在だけど、いつかはあのサーカスの兄や姉たちのように、朧な影になってしまうのかもしれない。虹蛇の卵にしたって、無事に孵って去っていったとして、いつかはエンリの記憶からも消えていってしまうのだろうか。

「エンリ？ どうかした？」

ロンドの呼びかけに、自分が思わず涙ぐみかけていたことに気づく。

慌てつつ、そ知らぬ顔で問い返すように見返した。

ロンドは……、どう形容すべきなのか、エンリにはいまいちよく掴めなかったが、たぶん戸惑っていた。

少し朱の差したように見えた頬をなぜか気まずげに逸らして、

「いや、なんでもない」

と言った。

ここ一年ほどは、月に一回、ダンスの特別講師をしに必ず東の州都に来ている。

ロンドがついこの間まで日常を営んでいた町に、自分は今も習慣として来ているというのも、不思議な感じがした。

ふだん田舎で暮らしていると、都会のビルの、たった五階とはいえコンクリートの町が見渡せる場所に馴染んでしまうというのが、感覚として慣れない。

「エンリ、この前トニーに会ったけど、あなたのこと絶賛してたよ。また一人、お得意さまが増えたかもね」

レスリーは自分のことように嬉しそうに言った。

普段なら首を傾げて終わりのエンリだが、さすがにレスリーには世話になりまくっている自覚があるので、ちゃんと言葉で返す。

「レスリーのおかげです」

この、自らも教官を務めるダンスアカデミーでエンリの特別講習を設定してくれているのもレスリーであれば、色々な仕事でエンリを重用してくれて、機会があれば知り合いのプロデューサーやらダンサーやらにエンリを推薦してくれているのもレスリーだった。

おかげでエンリは、この五年というもの、一度も自分から営業をかけずに、安定した仕事の依頼を得ることができている。

「あなたの実力だよ。ボクが何もしなくとも、才能あるものは才能ある者を放っておくことはできないものさ」

レスリーは今日は、白い羽をまぶしたようなまばゆい装束に身を包んでいる。余談だが、レスリーはこの頃また一段と輝いているので、また新しい恋人ができたのかもしれない。

「エンリ……何かあった？」

指摘に、軽く準備運動をしていたエンリは動きを止めてレスリーを見返した。

「ちょっと、元気ないんじゃない」

普段だったら、「なんでもない」で済ませるエンリだが……五年の間に、レスリーに対しては信頼と、ある種の連帯感のようなものを感じるようになっていた。それに、今日は少し、人に話してみたい気分でもあった。

「ずっと一緒にいた、家族のような奴が……二人、遠くに行ってしまうんです」

うち一人は人間では、生き物ですらないが。

レスリーはひどく悲しそうな顔をした。大げさなまでの表情の変化は、レスリーの場合本当に真情に由来するのだと今は理解している。

「悲しいね、エンリ。悲しいね」

エンリを包むように抱き締めて、エンリの気持ちを代弁した。

確かに……エンリは悲しい。エンリは辛い。時が経つことが、寂しい。

レスリーとこうして近くで触れ合っていると、エンリの中の、普段は眠っている部分で会話をしている気がして、レスリーは確かに、あの虹蛇に連なる何かをその身に宿しているのだという

感じがする。エンリのドラゴンそして虹蛇の卵が、同郷のものに遭ったような、そういう独特の感覚を伝えてくる。

「ねえ、だけどエンリ、その二人は、もうけして戻っては来ないの？」

エンリはレスリーを見上げる。

「一人は、たぶん、また普通に会いに来てくれると思う……時々なら、だけど。もう一人の方は、分からないけど、たぶん、無い」

「そう。……また、戻ってきてくれるといいね。そうしたら、この別れもけして終わりでは無くなるものね」

エンリは首を傾げた。

けして終わりではない、という言葉が、ひどく引っかかった……何か、その響きは大事なことを含んでいる気がした。

今、過去を思い返してしまうのは、喪失を前にして、失った時間を想うことで逃げている……向き合いながら、その実、巧妙に一番の痛みを避けているのだと、エンリは思う。

あの卵の、繰り返される嘆きは、まるで何も学びとらないのだとも見えたが、しかし正常とも言える……それは、少なくとも、感情と向き合うことから逃げていないからだ。

どんな思いで、産まれてきて、エンリの中にいたのだろう。どんな思いで、喰らい続けたのだろう。

旅立ちの日。

ロンドの荷物は、一年分としてはあまりに少ないようにも思えた。

しかし、新たな土地に赴く時というのは、案外そんなものかもしれない。

バスまでまだ時間があるので、庭で時間をつぶしている。なんとなく、エンリも付き合っていた。

「なんか、結局……」

ロンドが呟いた。

「持って行けない物、ここに置かせてもらってるし、これって全然、ここから自立してないよなあ」

エンリは首を傾げた。

「駄目なのか」

「駄目じゃ、ないけど……なんか、情けないというか、結局、甘えてるんだよなあ、と思って、さ」

そうだろうか。

エンリとしては、むしろ、その考え方が、まるで早くこの家との絆を断ち切ろうとしているようで、寂しい。

「エンリはさ」

「ん」

「ここに、いるんだよね。これからもずっと」

エンリは頷いた。いつのまにか、それは覆せない決定というふうになっていて、もはや自然のなりゆきであるようにさえ思えてきている。

「そっか」

ロンドは微笑んだ。

「よかった」

数瞬、その言葉に、どうしてだろう、と考えた。

それから気づく。エンリがここに居続けることは、ロンドにとっても、ふるさとが守られるということになるのだ。いつでも立ち寄りに戻って来られる岬を、未来へ船出するロンドに与え続けることになるのだ。

なんだ、とエンリは急に力が抜けるのを感じた。

エンリは、ロンドを失わない。ここにある全てが、ロンドとの色濃い思い出を伝えてくれるし、それにロンドは、どれほど時間を挟んだとしても、帰って来る。惜しんでいるのは、エンリだけではなくて、ロンドも一緒なのだから。

どこに行ったら、ロンドもたぶん、エンリのことを忘れない。帰って来ないまでも、きっと連絡はくれるだろう。またどこか別の所で会うことだってできるし。ソフィーとだってそのようにして時々だが、会っているのだ。お互いがどこにいても、少なくとも相手がロンドである限り、繋がりそのものは断ち切れない。

そう気づくと、このところの感傷的な自分がばかばかしくなってきたエンリだった。

今までと大して変わらないのだ。

「いつでも、帰ってきていいよ」

その言葉はするりと出てきた。

「甘えとかなんとか、知らないけど。どうせおれはここにいるんだし、ママだっているんだから、好きな時に好きなだけ、帰って来ればいいよ」

言いながら、ぱちぱちという孵化の音を聞いた。

同じ気持ちを、卵に対しても持つ。おまえが今度こそ本当に生まれて、この世のどこに行ったとしても、エンリの中で過ごした時間は失われない。もしも何百年も経ってしまったら、さすがにエンリはこの世にいないだろうけど、エンリが卵に対して持った、愛情――と呼んで差し支えないものは、無かったことにはならない。だから、おまえはいつでも、ここに帰って来られる。

虹色のエネルギーの塊が、エンリを呑み込むように広がって、そのまま太陽を目指すように天に昇って行った。

天地の架け橋のような虹だった。

直線に立ち昇る様は、あの日のドラゴンを思い起こさせ、たしかにドラゴンとの混血であるのだとエンリに確信させた。

ロンドを見ると、不可思議なものを見たといった様子で瞬きをしている。

しかし、今起こったことを全て目にし、把握できた訳では無いようだった。

ただ、空を見上げて、

「なんだあれ……虹？ 雨も降ってないのに」

と声を上げた。

「おまけに、垂直に伸びてる」

眩しがって手をかざしながら、いぶかしんだ。

「……でも、綺麗だな」

「うん」

エンリも声にして同意する。

ロンドはしばらく虹に見惚れていたが、しばしして再びエンリを振り返ると、驚いた顔をした

。「エンリ、今、ひょっとしてふつうに笑ってる？」

言われて眉を顰める。

別に、そんなつもりも無かったが、仮に笑っていたとしてももう台無しだろう。

現に、ロンドは、失敗した、という顔をした。

「あのさ、エンリ。変なこと言っている？」

先を促す。

「エンリ、これから旦那さんをもらう予定ってある？」

エンリはいぶかしんで顔を顰めた。まずありえない話だったからだ。

「無いけど」

「じゃ、おれが帰って来るまでは、そのまま予定を入れないでおいてよ」

「……別に、いいけど」

「それで、できたらエンリの隣は、おれのために空けておいて」

エンリは、むしろ呆れたというぐらいの気持ちでそれに答えた。

「心配しなくても……だから、帰ってきたらロンドの居場所がなくなってるなんてことは、無いってば。前にも言ったろ。他の所が無くなっても、ここのロンドの場所は消えないから、安心して、好きなだけあちこち行ってくればいいよ……あ、でも、時々は連絡してよね」

ロンドは鳩が豆鉄砲食らったような顔になったが、それから爆笑した。

その理由をエンリが理解するのは、もっとずっと後のことだ。